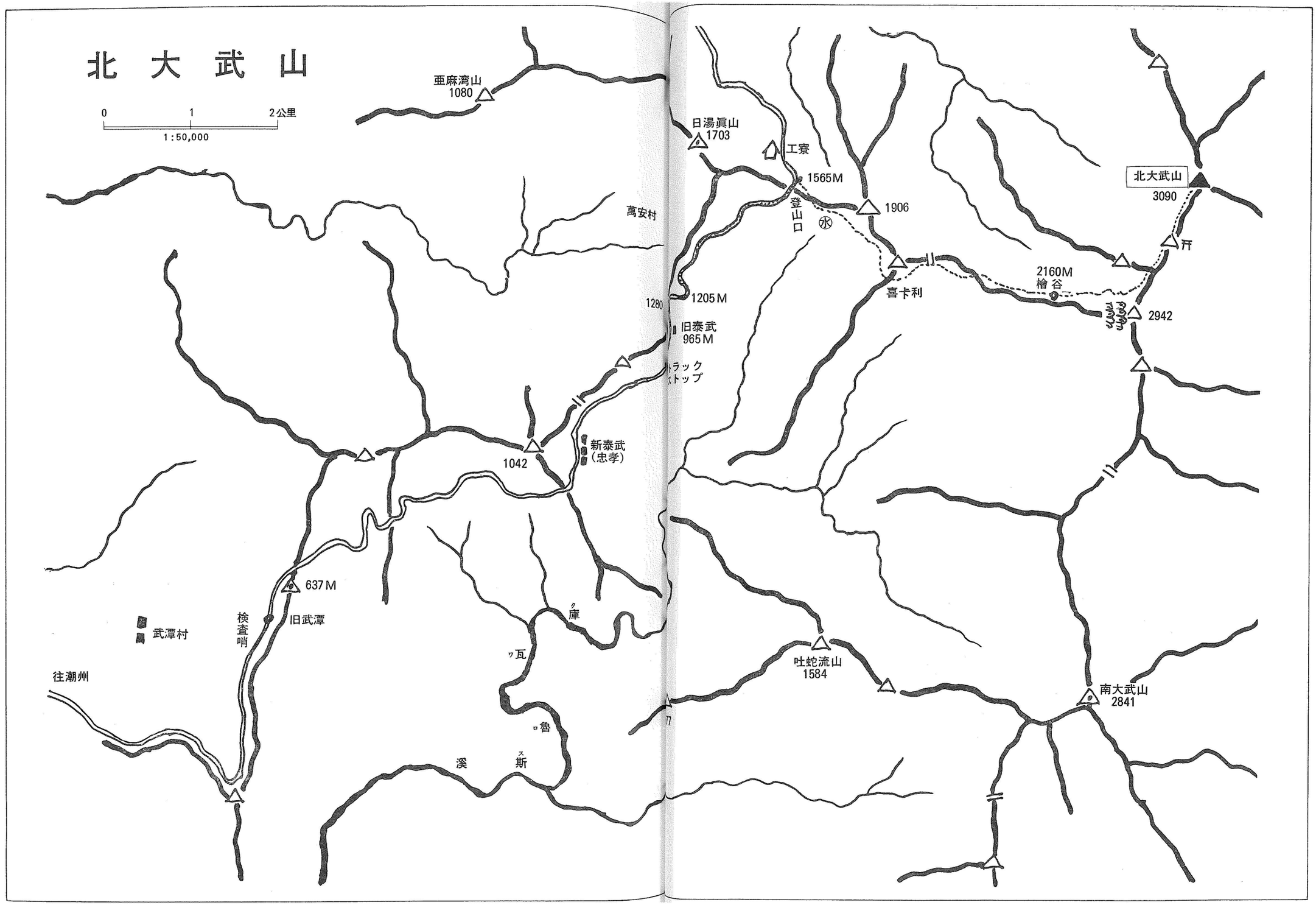
北大武山


0
1
2公里
1:50,000
亜麻湾山
1080
日湯眞山
1703
工寮
1565M
登山口
水
1906
北大武山
3090
万
2160M
檜谷
喜卡利
2942
萬安村
1205M
1280
旧泰武
965M
トラック
ストップ
新泰武
(忠孝)
1042
637M
旧武潭
検査哨
武潭村
往潮州
庫
瓦
魯
溪
斯
吐蛇流山
1584
南大武山
2841

（マイクロバス）一七K　六〇K　（一九五〇米）
台北═新竹═竹東㊟═五峰検査哨═清泉═観霧検査哨═
二・三〇　0・三〇 申告三〇分 一・00　一・三〇 検査三〇分 一・00
一二〇K　四K（二七〇〇米）（三〇五〇米）
馬達拉溪═九九山荘㊟═稜線═耶巴奥山═伊沢山登山口
四・00　一・三〇　0・三〇　一・三〇
アイセン（山荘—頂上八・五K）
—情人橋═中霸森林═風口═小霸分岐点═梯口═頂上
一・00　0・三〇　0・四〇　0・三〇　0・三〇
分岐点═小霸尖山═風口═中霸═三〇五〇═九九山荘㊟
0・三〇　〇・三〇　〇・三〇　二・00　0・四〇
—溪底═竹東═台北
00　四・00　二・三〇

(1) 九九山荘—風口間七・五km。冬季中霸尖山東側森林帯に深雪のある時はラッセルを強要される。風口よりの進入コースは必らずアイゼン装着のこと。

(2) 長時間の行動につき山荘出発時にはヘッドランプを点検し携行することである。

北大武山（三〇九〇米）

三〇〇〇米級の名峰として中央山脈最南端に位置するをもって、五岳中の一座に迎えられているこの山は、山頂付近まで常緑樹（鉄杉、柏、楠、紅桧等）で覆われ、一見取付き易い感じがするが、四方断層陥没のため登山道は案外急峻である。百岳集によれば断層面の高度は東一四〇〇米　西二六〇〇米　南八〇〇米　北一〇〇〇米となっている。玉山に劣らぬ四囲は千仞の絶壁、優美な緑衣に似ず身は峨々たる山容の持主である。この地は昔より挑湾（バイワン）族の領地であり現在も集落を構えている。

登山道はこの入口武潭検査哨より丘陵地帯に上り、泰武部落を経て登山口に至る。途中の道路は長年自然崩壊のままになっている所がある。ここで車を下り徒歩となる。登山口（一五六五米）より一九〇六米の稜線に出、尾根伝いに北大武山を左に眺めつつ進み、喜卡利（キカリ）（標識なし）で左に転じ最後の壁に挑むことになる。これからが正念場。露出する粘板岩は滑り易く、特にガスの為表面が濡れている時は尚更要注意である。

正面に仰ぐ二九四二米峰の大岩壁に圧倒され乍ら四〇度の急登が続く。小屋は四〇人が仮泊できる頑丈な造りである。小屋の前の広場には十張程度の幕営は可能。稜線に出て約一時間、小高い山の上に日拠時期に建てられた大武祠があったが、今は本殿、石碑等が倒壊散乱しているのみである。頂上からの眺めは良好である。熱帯地域の為始終雨、霧に悩まされる所であるが、一〇月、一一月は最も天候に恵まれる時期である。

「特急㊟・一五」
台北▮▮高雄▮▮屏東▮▮潮州㊟═武潭═泰武═下車═登山
トラック一二K 検査哨一一K　三・五K　七・五K　0・四〇　0・三〇　0・三〇　0・三〇　二・三〇
四西K　二二六〇米　頂上まで三・六K　二八〇〇米　三〇三五米　三〇九〇米
口═桧谷㊟═稜線═大武祠═頂上═下降点═桧谷㊟═
五・00　二・三〇　一・00　一・三〇　一・三〇　一・三〇　二・三〇
トラック　下山申告
登山口═乗車═泰武═武潭═萬巒═潮州▮▮屏東▮▮高雄
一・三〇　二・00

▮▮台北（夜行列車）又は南部観光後台北に帰る。

南湖大山　（三七四〇米）

（縦走併記）

雪山と相対峙しその偉容は冠たるものがある。三五〇〇米以上の高峰七座を従え、主峰の東側には雪山と競う広大なカールが北に延びている。七座とは北山（三五三五米）北峰（三五八〇米）東北峰（三五五三米）東峰（三六三九米）東南峰（三五二六米）中南峰（三五〇〇米）南峰（三五一六米）である。

冬季は雪山に次いで雪の多い地帯である。

アプローチは長くかなりの体力が要求される。前半は稜線上漫歩の南湖、雪山山脈を望む一大パノラマコースであるが、後半は岩礫荒涼の地帯に変る。北山より北峰の間に五～一〇米のコブ三、四箇所あり。夏季はフリーで越せるが、冬季凍結の時は危険である。アイゼン必要。西面南湖渓側に切れ落ちる一〇〇〇米の岩壁は豪壮極りない。主峰より南峰にかけては稜線上に巨岩怪石乱立し、三〇〇米の下降を余儀なくされ、再び稜線に向って岩石累乱の中を急登。体力の消耗はここで極点に達する。下降途中の森林帯に熊の生棲あり（新しい足跡発見）。最後に痩尾根のトラバースに肝を冷やし漸くにして立錐峰の頂点に辿りつく。

頂上より眺める中央尖山の雄姿、将に中央山脈背稜の盟主と讃えたい。足下より遙かに中央尖渓へと落ちる渓谷を左手にして高度差一二〇〇米の下降は長く辛い。清流の音谺（コダマ）し蘇生の思いも束の間、流れを前にして八〇米の壁を木の根伝いに緩降、目指す避難小屋に着く。これより中央尖渓を渡渉下降するコースについては中央尖山の項で述べる。

一九二〇米

（夜行）マイクロバス　七二〇林道（熹宮可）六・五K　二七二〇米　二七九三米　二五二〇米

台北═══思源埡口──登山口──稜線──多加屯山──木杆鞍部──

五・〇〇　入山申告　〇・三〇　二・三〇　一・三〇　〇・三〇　六・三〇　〇・四〇

◎台北──宜蘭経由が最端距離である。

二五〇〇米　三一四〇米　三五八〇米　三三〇〇米

雲稜山荘㊟──審馬陣山──北山──北峰──南湖山荘㊟──（カール）

三・三〇　二・〇〇　一・〇〇　〇・三〇

三七四〇米　三五〇〇米　三五一六米

──鞍部──南湖大山──鞍部──南湖池山荘㊟──渓底──南峰──

一・三〇　一・〇〇　〇・三〇　〇・三〇　一・〇〇　二・三〇　五・四〇

二三六〇米

中央尖渓避難小屋㊟　南湖山荘、南湖池山荘共半倒壊の状態の為、冬季は防風雪の要あり。

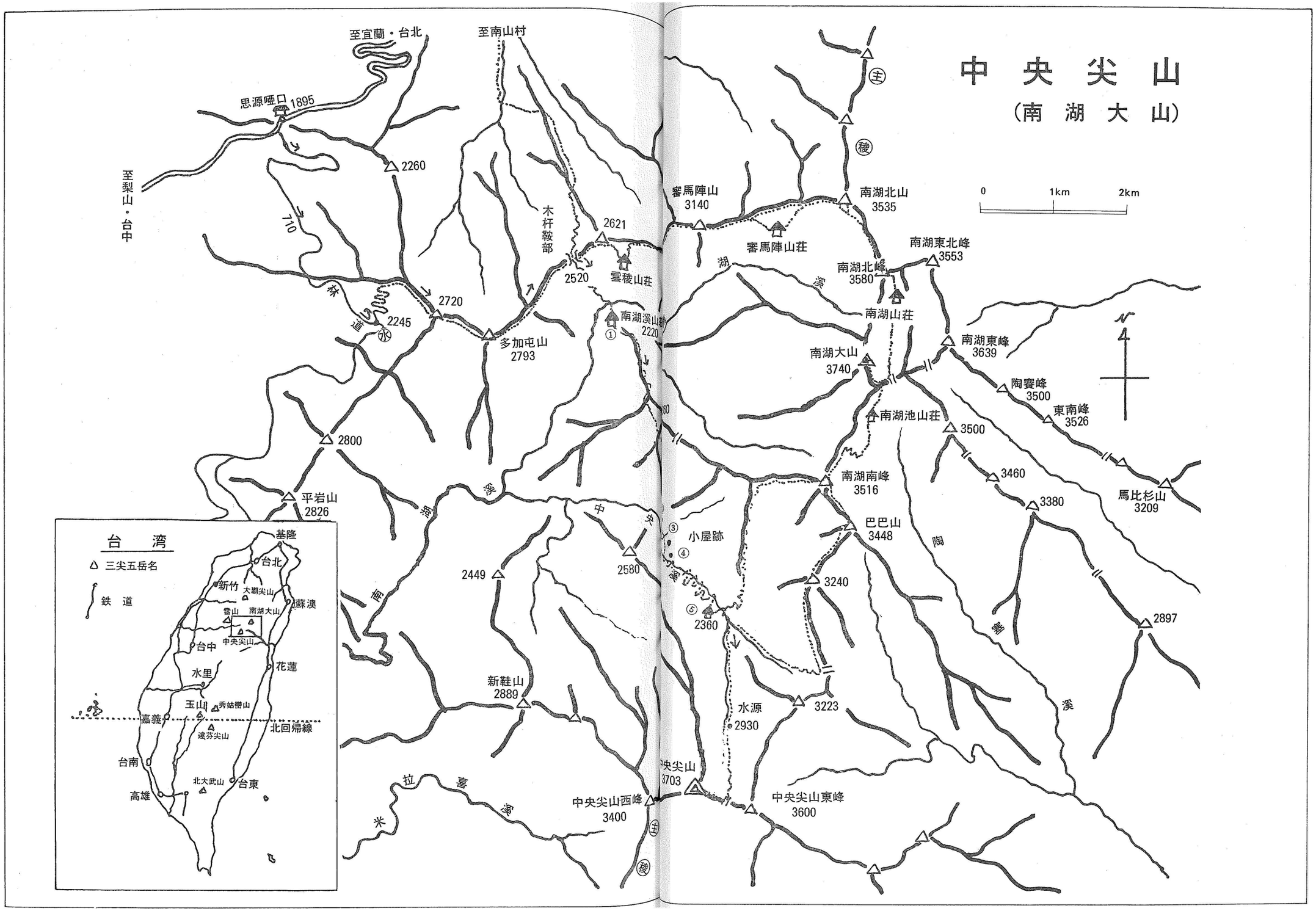
避難小屋（渡歩）第三香菇寮（シャンクーリャオ）跡──二八六〇──南湖渓山荘㊟──台北

（注）台北へのコースは別項中央尖山に準ずる

中央尖山　（三七〇三米）

百岳中最も崇拝する山としては、中央尖山をおいて他にない。山容の威厳と険阻に於いて群を抜く。登山口より二日を要し南湖大山から西に延びる二本の支脈、渓底よりの高度五五〇米を越え中央尖渓の渡渉が続く、第三日目小屋より再び渡渉となり水源と別れ、鞍部より頂上へと一挙に一四〇〇米の直登が待ち構えている。余程体力に自信のない限り挑戦はむつかしい。

中央尖山
（南湖大山）


至宜蘭・台北
至南山村
至梨山・台中
思源哑口 1895
2260
710
木杆鞍部
2621
2520
雲稜山荘
南湖溪山荘
2220
2720
2245
多加屯山
2793
2800
平岩山
2826
2449
2580
新鞋山
2889
小屋跡
2360
水源
2930
3223
3240
巴巴山
3448
南湖南峰
3516
中央尖山
3703
中央尖山西峰
3400
中央尖山東峰
3600
審馬陣山
3140
審馬陣山荘
南湖北山
3535
南湖東北峰
3553
南湖北峰
3580
南湖山荘
南湖大山
3740
南湖東峰
3639
陶賽峰
3500
東南峰
3526
南湖池山荘
3500
3460
3380
馬比杉山
3209
2897
0
1km
2km
N
台湾
三尖五岳名
鉄道
基隆
台北
新竹
大嶺尖山
蘇澳
雪山
南湖大山
中央尖山
台中
花蓮
水里
玉山
秀姑巒山
嘉義
北回帰線
遠芬尖山
台南
北大武山
台東
高雄

他の七座にない渡渉は日本の様に簡単にはいかない。川石は表面が滑り易い苔に覆われていて鰻の背と同じ。乗れば必らず滑る。それに連続する滝に阻まれ高巻きとなる。渡渉の繰返しが水の少ない時で約三〇回、その上直径一米をこす倒木が数多く行く手を遮ぎり、疲労困憊はその極に達する。出来得れば一月二月の渇水期を選べば、水深も精々三〇糎、川巾も一〇米以内にとどまる。安全に渡渉する為私達は深長のゴム地下足袋（磯釣用）を穿き、ストックを両手に体を支え、出来るだけ砂地まで掘り起しながら前進した。

一四〇〇米の登高は些か手古摺る。約三〇分の渡渉の後登山靴に履きかえて出発。見上げる彼方に鞍部三四八〇が我々を待ち構へる。それより一直線にガレ場が足元まで落ち、両側の岩壁はハング気味で身に迫る感じ。落石頻発の跡もまざまざ。「頭上小心」（トウシャンシャオシン）空気の稀薄さもこたえてくる苦しい四時間の登高である。板状に割れた砂岩の堆積の為滑って歩きにくい。雪のある時にアイゼンを利かして登るのが遙かに楽である。コルに出て岩稜を一時間余りで、目指す三等三角点の基石を踏むことが出来る。真近かに西峰（三四〇〇米）東峰（三六〇〇米）と負けず劣らずその険阻を競う。この三日間苦斗のコースを眼下に、見上げる空に南湖大山の雄姿、更に雪山山脈の連座を眺めることが出来る。

マイクロバス
台北＝宜蘭＝南山＝思源唖口（休憩を含め五時間）——登山口——二七二〇——多加
一八九五米　七二〇林道六・五K　二二四五米　二七
二・三〇　一・三〇　〇・三〇

九三米　二五二〇米　二二二〇米　二七五〇米
屯山——木杆鞍部——南湖溪山荘㊟——二八六〇稜線——中央光溪
二・三〇　一・三〇　三・〇〇　二・〇〇

三K　二三六〇米　二九三〇米　三四八〇米
第五香菇寮㊟——水源——鞍部——頂上——鞍部——第五香
〇・三〇　二・〇〇　二・三〇　一・一五　〇・三〇　三・三〇

（渡歩終了地点）
菇寮㊟——第三香菇寮跡——二八六〇——南湖溪山荘㊟——木杆鞍
三・三〇　二・〇〇　二・〇〇　一・三〇

部——多加屯山——二七二〇——登山口——思源唖口＝台北
三・〇〇　〇・三〇　一・〇〇　二・三〇

（注）文中香菇寮とあるのは山胞達が茸、薬草取り、狩猟の為作られた草茸の小屋であったが、南湖溪小屋と共に林務局の援助により立派な小屋（一五人泊）が建てられた。南湖溪山荘も以前は第一香菇寮であった。途中の第二、第三、第四香菇寮は今は姿はない。

環山について　思源唖口より南に流出する大甲溪に沿い下ること二〇㎞、車で約三〇分、標高一七〇〇米の開けた段丘上にある泰雅爾（タイヤル）族の集落である。第二次大戦中成年男子が日本軍徴用軍属として、南方、ビルマ、マレーに派遣され、道路開設の苦役に従事した。年配の方は殆ど日本語が話せ未だに当時の日本名を名乗る人が多い。又日本の歌謡曲も私達以上によく知っている。生活は政府から土地を与えられ、殆どが農耕にたづさわり果樹栽培が盛んに行われ、見渡す限りの丘の波は果樹園である。その生活振りは豊かで島内一である。先般帰路に環山で一泊したが村人約六〇〇人がスポーツセンターに集り、私達に対し盛大な歓迎会を開いて呉れた。至って親日派である。訪ねた詹秀美（チェンシューメイ）女士（ニュイ）（奥様）も日本名を小林淑子といい、村では文化部を担当し踊りも上手。ヨーロッパ、日本、アメリカへと度々舞踏団を率いて訪問の旅を続けている。

島内には高地民族が二五～三〇万人住んでいる。その主なものを北から述べるとサイセット、アミ、タイヤル、プノン、ツオー、ルカイ、ピューマ、パイワン、ヤミの九族に大別される。

秀姑巒山　（三八六〇米）

本島第三の高峰。中央山脈の心臓部であり、山頂に至る距離も長くいづれのコースも入山地点より三日を要する。古くから中央山脈を越え東海岸に達する八通関古道と称する道がある。この道をかって鄭成功が部下に命じて採掘した金砿石を運んでいたという話もある。秀姑へは現在も唯一の登山道として利用されている。

コースは温泉とても名ばかりの布農族部落東埔をあとに延々二四km、濁水渓の支流沙里仙渓に沿って進み、間もなく左に別れて陳有蘭渓に入る。渓底を三―四〇〇米下方に見下ろしながら、山肌を忠実に縫って登る古道には些かアキがくる。左側山稜東側の谷に水里より上る郡大林道（六六、七km）があるが、降雨でよく崩れ不通になることが多い。もしこのコースを選ぶならば、水里より朝三時半に出発する運材車を利用すると便利である。この場合前もって料金、搭乗人数を決めておく必要がある。双方の道は観高で合流する。三kmの登りをつめると準平原の八通関に着く。右奥に一五人くらい泊れる小屋が見える。広々とした草原で右すれば玉山へ、左に転ずれば秀姑に通ずる。途中古道は右に分れ老濃渓を飛び越え、山麓を捲きながら中央山脈の鞍部大水窟に通じている。古道と分れ直進すれば間もなく一五人程度入れる真新しい小屋がある。ここは中央金砿採掘場跡である。翌朝軽装ならその日のうちに秀姑往後は可能である。

ここからの道は気分一転、荒場に変り急坂となる。木の根、倒木を越えて苦斗の二時間。中央稜線の直下、段差七、八〇米の所に白洋金砿小屋跡が目に入る。一〇米位の草葺屋根があるだけで、辛うじて雨露をしのげる程度、冬の素泊りは不適。稜線上は盛り上った草原で秀姑坪という。この稜線を南に取れば大水窟山（三七二四米）を経て達芬尖山に連らなる。秀姑坪を越え道は急角度に谷に降り岩場のトラバースとなる。本コース中最も危険な所である。右下の谷は奈落の底につながる深さである。道が上昇し再び稜線に出た地点で馬博拉斯山への分岐点となる。最後の頑張り、小さく波打つ枝尾根を五つ六つ、斜に踏みしめつつ登ればやがて頂上に出る。北に臥牛の如く第四の高峰馬博拉斯、西正面遙かに高く長く尾を引く玉山連峰を見渡し、南眼前に隆起平原の稜線豊かな大水窟、南大水窟、そして達芬、雲峰、向陽、関山と三〇〇〇米以上の山々が続く。

台北 ═ 台中 ═ 水里 ═ 信義検査哨 ═ 東埔温泉㊟ 一一二〇米
（マイクロバス　途中休憩六時間）

（東埔 ― 観高一二〇K）

東埔 ― 雲龍瀑布（高サ一五〇米） ― 乙女瀑布 ― 石洞 ― 対関（二六〇〇米） ― 観高（二八五〇米） ― 八通関
二・〇〇　一・四〇　一・三〇　〇・三〇　一・四〇　一・二五

㊟ ― 中央金鉱跡（二九〇〇米） ― 白洋金鉱跡（軽装 三五〇〇米） ― 秀姑坪（三五八〇米） ― マボラス分岐点（三八六〇米） ― 頂上
二・三〇　三・〇〇　〇・三〇　二・〇〇　〇・三〇

白洋金鉱 ― 中央金鉱㊟ ― 八通関 ― 観高 ― 対関 ― 雲龍瀑布 ― 東埔㊟ ═ 台北
一・三〇　一・四〇　二・三〇　〇・四五　一・〇〇　二・三〇　一・三〇　六・〇〇

◎雲龍瀑布次に楽々温泉下降点を経て間もなく楽々避難小屋がある。

右記時間帯は本隊の行動記録である。登りは東埔を早朝出発、当日中に中央金砿まで入り一泊するのが得策である。

帰路東埔より水里を経て、日月潭、埔里と回遊してみてはどうであろうか。

八通関古通

秀姑巒山・達芬尖山

0 1 2 3KM

1：50,000

× 印危険箇所

至水里

至東埔

対関山 2977

駒盆山 3189

馬博拉斯山 3805

観高山 2815

観高 2600

八通関山 3404

八通関 2850

秀姑巒山 3860

中央金鉱跡 2900

白洋金鉱跡 3580

秀姑坪 3580

玉山東峰 3940

杜鵑 3120

大水窟山 3724

3250

2930

大水窟 3280

南大水窟山 3399

鹿山 3043

3172 北面山

3190

老鈴尖 3160

達芬尖山 3222

2960

北回帰線

23°27′

至玉里

至玉里一台東

達芬尖山　（三二二二米）

三尖五岳の中で最も近づきにくい山である。従ってその登山人口は八座中最も少ないと云われている。位置は玉山の東南方中央山脈上にあり、小型ながら槍の尖峰を見せている。直距離僅か九kmであるが、その間に南流する荖濃渓が両座を深く遮断している。玉山越えの場合中央山脈に通じる支脈を東進し、八通関を経て大きく迂回し尚三日を要する。幾条にも広がる荖濃渓支流を二回渡渉、その間三〇〇—四〇〇米の上り下りの乱石急坂と山を覆う箭竹（センチク）の障壁に可なりの体力消耗を覚悟せねばならない。

（注）箭竹とは笹竹の一種で背丈五〇—八〇糎、葉は二〇耗、巾三粍位の小さいもので枝に密生している。枝は針金の如く強靱で力を入れて前に押さないと重心を取られる。風に靡かない笹である。

アプローチは長く道は荒れ、各所に見られる崩壊は多雨の為地盤は軟弱で高巻きを繰返し、断崖のトラバースを余儀なくさせられ、最終の夜営地には小屋はなく天幕が必要である。

最も便利なコースとして従来は水里より朝三時半に出発する運材トラックを利用、六六・七kmの郡大林道（第七項秀姑巒山を参照）を南進、その日のうちに荖濃渓営地に着くことが可能であったが、毎年続く水害の為崩壊甚だしく現在は利用出来ない。目下拡幅復旧工事が続行中、一九九〇年七月を開通の目途にしているが見通しはくらい。

第九次訪華友好登山隊として、一九八九年一二月末台北を出発したが連日の降雪に玉山周辺は積雪に続く雪崩が続発、東急斜面の崩壊甚しく、殊に三箇所の断崖トラバース地点は完全に遮断され危険度も高く、鋭意コース変更と決め東埔温泉より八通関古道を忠実に進むことにした。八通関まで延々二四km、高度差一七〇〇米を踏破する長途遠征である。

台北—（高速道路）—泰安——草屯——水里——信義検査哨——東埔温泉㊟
　　└──三・〇〇──┘　　一・〇〇　一・三〇（〇・三〇）　〇・三〇

東埔——（八通関古道）—八通関㊟　二八五〇米
　　時間帯秀姑巒山の項に準ずる。

（注）対関手前に大崩壊二箇所有り。要注意

八通関——分岐点——荖濃渓底—（大水窟山西稜）—杜鵑（ツツヂ）営地——西南　三一二〇米　三二二五〇米
　　二・〇〇　〇・三〇　└──二・三〇──┘　一・〇〇

（注）分岐点手前に避難小屋有り。

稜——荖濃渓工寮跡㊟　二九三〇米
　　〇・四五　杜鵑—西南稜間二ケ所断崖トラバース有り
　　深重に通過を要する。

工寮跡——北面山稜線——最低鞍部——頂上——鞍部——工寮跡㊟　三二二二米
　　一・三〇　一・二〇　一・二〇　└──三・〇〇──┘

（注）稜線最低鞍部に避難小屋有り。

工寮跡——西南稜——杜鵑——荖濃渓——古道——八通関——観高㊟
　　一・三〇　一・〇〇　一・〇〇　〇・四〇　二・〇〇　一・〇〇

（注）観高平東下方三〇〇米、郡大林道に面し工寮五、六棟有り。

観高――東埔温泉㊙　（注）乙女、雲龍瀑布間に楽々避難小屋あり。
五・三〇

東埔温泉＝＝日月潭＝＝埔里＝＝（高速道路）＝台北
一・三〇　〇・四五　四・〇〇

（注）東埔―達芬尖山往復八〇粁　重装備、険悪路の為余程体力に自信ない限限り入山は無謀と考えられる。

ヒマラヤトレッキング

（アイランドピーク）

小林利樹

夢はヒマラヤへ。ヒマラヤ、それは私達岳人にとっては遠い夢でした。〝ヒマラヤへ〟行こう。しかし、休暇のこと、お金のことｅｔｃ、色んなことが頭をよぎりました。ネパール政府の、トレッキングや登山可能な一八座が解禁されたことから、私達の経験（何分にも始めてなので）技術、日数及び予算で十分な登山を行なうということができそうなアイランドピークを目標に決めました。でも結果は雪が少く登頂できず大変残念でした。

以下に一九八四年三月二八日から五月六日までの、アイランドピーク周辺を歩いた概要を記しました。

三月二八日

長年の夢であったヒマラヤ山行が今日実現し、大阪空港から、家族友人の見送りを受け出発する。二一時頃（日本時間）香港着陸、機内清掃及び燃料補給をする。二四時頃バンコク着。タクシーでホテルに向う。

三月二九日

バンコク～カトマンズ

三月三十～四月一日

シェルパの雇用や食料の買出しで時間を費す。

四月二日

本日はルクラへ飛ぶので朝早くから空港で待機するが、私達の乗

〈あとがき〉

▽入山手続▽四名以上の人員であること。各岳連会長の推薦状、登山計画書（隊員名薄、コース、行動計画、装備、食糧等）を中華民国山岳協会に郵送する。人員に応じ中山協より一―二名の嚮導員が共に行動することになる。入山料一人六百元と嚮導員の行動中の一切の費用を負担する。入山申請は三カ月前までに行う必要がある。詳細については岡田まで問合せ願いたい。

る一二一便は飛行機の故障でフライトキャンセルだ。以後の便は予定通りのフライトで私達の乗る便だけがダメ。さいさきの悪いスタートで先がおもいやられる。

四月三日

本日もフライト待ち。

四月四日

フライトすることになって、ルクラ空港（空港といっても山の斜面を切り拓いただけの飛行場）まで行くが、気流が悪くまたカトマンズまで引き返す。いつになったら行けるやら!!

四月五日

本日もフライト待ち。

四月六日

今日は最終便（一日三便しかない）の席がやっと取れた。これで行けますようにと祈る。無事ルクラに着き一安心する。

本日はシェルパの再雇用をしなくてはならない（フライトの席が二席しか取れなかったのでカトマンズで雇った人はこられなかった）ので紹介された「ニマ」氏を雇う。

四月七日

本日からのキャラバンのためにいろいろと買出しをし、ポーター、キッチンボーイ等の雇用をする。

いよいよ出発である。

午前中昨日の足りない分を買い足し、午後からルクラ街道へ。世界のヒマラヤニストの歩いた道を自分の足で歩こうとしている。感慨無量だ。

ポーター達に荷物を持ってもらい私達（二人）はサブザックだけなので歩く足取りも大変軽い。

本日の宿泊地「パクディグマ」に一五時頃に着く。この頃から少し下痢気味。夕食はアメリカ風チャパティ。

四月八日

ドウドコシを右に左にと見ながら高度を少しずつ上げて行き、ジョサレからナムチェへは急登になってくる。ビスタリー、ビスタリー。

ナムチェ泊。

四月九日

ナムチェをあとに一路タンボチェを目指して進む。エベレスト、タムセルク、アマダブラム等が見え最高。本日はタンボチェ泊。

四月十日

朝、目が覚めると雪が降っているので、本日は「ステイ」とシェルパがいう。ポーターが裸足なのだった。

午后から私達二人でパンボチェに向い、パンボチェで泊る。

四月十一日

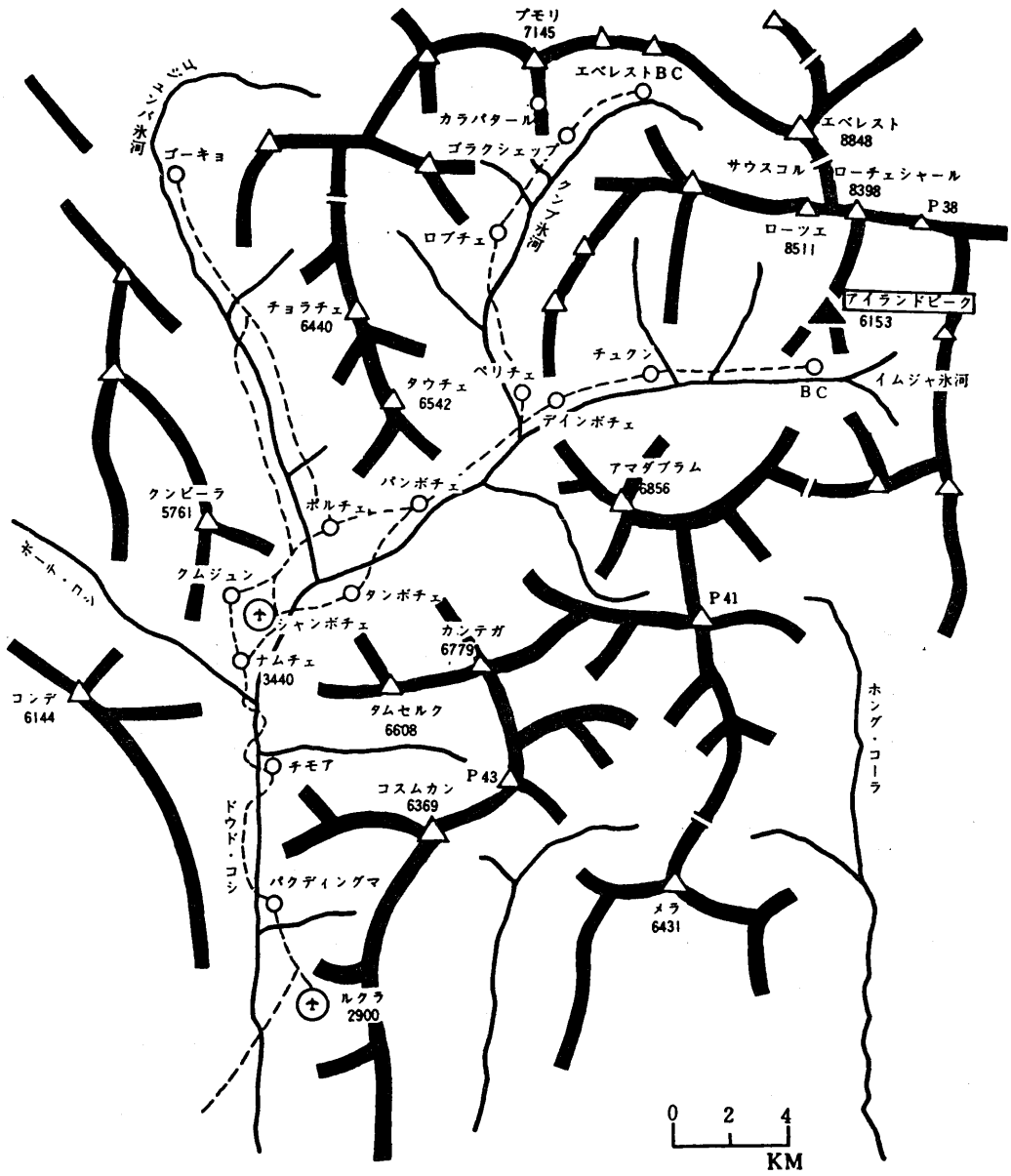
シェルパ達を待つ間周囲の散歩をする。合流後ディンボチェへと行く。高度は四四〇〇メートル。

四月十二日

本日はチュクンに向けて出発する。

始めての高度なのでビスタリ、ビスタリの連続。あまり速く歩くと頭痛がする。アマダブラムはパンボチェで見るよりもすごい迫力でせまってきている。ここ数日午後になると雪が降っている。午後

アイランド・ピーク周辺図



からチュクンピーク（五〇四三メートル）へ登りに行く。このピークは大変広くケルンがポツンと寂しそうに立っていた。

四月十三日

本日はBCまで行く。大変苦しい。少し高度障害をうけたのだろう。

四月十四日

昨日相棒は頭が痛いとチュクン迄下山したので、本日はシェルパと一緒に五六〇〇米位まで行く。息切れがひどく歩くのがかなり遅くなってきた。

四月十五日

本日はAC入り。この日もシェルパと二人だけ。

相棒のことが少し心配です。

四月十六日

シェルパと二人で行くが雪が非常に少なく、ノーマルルートから雪壁に取り付く所が広く雪壁にうつれません。ダイレクトに行こうと思うがザイルやハーケン類を少ししか持っていなかったのでBCまで下降する。

四月十七日

BCに相棒も帰ってきていたので一安心する。

一日中日光浴をしてステイ。

四月十八日

本日もう一度二人で登りに行くが状況は昨日と変らず、クレパスが多くしかたなくあきらめる。非常に残念だ。無理をして事故でも起こすと迷惑もかかるし、またくればよいのだと心に思う。下山後チュクンまで帰る。

四月十九日

チュクン〜パンボチェ。

パンボチェでイエティの頭皮と手の骨を見る。

四月二〇日

パンボチェ〜チモア

四月二一日

チモア〜ルクラ

シェルパの家でささやかなパーティーをする。

始めにチャン（どぶろく）を飲み、ロキシーやジンを交互に飲みながら、バカ話をして夜遅くまでさわぐ。

四月二二日

フライト待ち。

四月二三日

今日もキャンセル待ち。やっと一席だけ空いたので、一足先に僕だけカトマンズに帰り、ヒマールトレックへ挨拶に行く。

四月二四日

相棒も帰り市内見物をする。

四月二五〜五月二日

ポカラ方面へトレッキングをする。

五月三〜五日

ネパール〜バンコク〜帰国

長かったようで短いヒマラヤ行きでした。何分にも見るもの聞くものが始めてであり、最初はとまどいもありましたが、慣れるにしたがい少しガメツクもなりました。もう一度あの雄大なヒマラヤへ行けることを願いつつ。

アルプスそしてピレネーへの山旅

土居健次

一九七〇年、十二月十一日、私はソ連の客船「バイカル号」に乗船、横浜港から生まれて初めて日本を出国した。二六才の時でした。

山登りの好きな人なら一度は登ってみたいヨーロッパ・アルプス、そしてヒマラヤへの憧れを、今私は実現しようとする。しかし不安はいっぱいあった。この山旅のための資金は、社会人になって三年間で七〇万円預金出来たのでそれを充てた。当時ドルの換金は千ドルしか認めてくれず、残り日本円で持参した。その時のドルのレートは、三六〇円。日本からスエーデンのストックホルムまでの片道切符、約一〇万円を出国前に支払った。そのコースはナホトカまで二泊三日の船旅。ナホトカからハバロフスクまで一六時間汽車の旅。ハバロフスクからモスクワまで空の旅約九時間。モスクワで一泊、次の日の夜行列車でレニグラードに向う。レニグラードで一泊、次の日の夜行列車でヘルシンキに、そしてヘルシンキからストックホルムまで飛行機、合計八日間の道のりである。ストックホルムまでは梅原氏と同行しているので、全くの観光旅行の気分だった。

私がこの二年間にも及ぶ山旅の決心ができたのは梅原氏の存在と、この時すでにロスアンゼルスにいる数野氏の両氏の大いなる影響があった。両氏がもし神戸山岳会にいなかったら私のこの二年間の旅は実現しなかったかも知れません。

ストックホルムの生活

ロスアンゼルスに滞在している数野氏とは、七一年六月二一日にフランスのシャモニーで再会することになっているので、その間手持ちの資金を減らさないように、アルバイトをして増すことにした。

梅原氏とは、彼のフィアンセのアンヌマリーの実家、ストックホルムより汽車で二時間半かかるエスキレステナという町で、一〇日間過させてもらった。彼女の御両親の暖かなもてなしは今も忘れることが出来ません。初めて味う本場のクリスマスは、家庭的で静かで暖たかな雰囲気につつまれたそれは心残るものです。七〇年の大晦日、彼女の友人宅に招かれ素晴しい食事をごちそうになる。食事中に七一年一月一日を迎えた我々はシャンパンでカンパイ、スエーデン語でスコールを言い合った。この日から私の一人旅が始まる。再びストックホルムに一人戻った私はさっそく安いホテルを探してアルバイト先を見つけることにする。

当初仕事を見つけることが難かしく、軒なみレストランにとび込んでは断わられた。それでもなんとか単発的な仕事が見つかり資金が増え始めた。そうこうするうちに長期の仕事を見つけることが出来て五月一〇日まで働き、約四五〇〇クローネ、当時の日本円にして三一万

円も貯金出来た。ワークパーミッションというビザなしにしてよくも貯ったものだと感心する。ストックホルムを出発する時の所持金は一六〇〇ドルと日本円三〇万円、合計約九〇万円であった。そして七二年十二月に帰国した時の私のポケットには一万円も残ってはいなかったのである。

ストックホルムでの四カ月以上にわたる生活は、なにもアルバイトばかりに明け暮れたわけではなく、色々な人々との出合い別れがつい先日のように思い出されます。そんな中で「グニラ」という恋人のことが楽しい青春の思い出として心に残ります。

あれから二〇年過ぎようとしている当時のスエーデン人の生活が、現在の日本人の生活と比較してもまだ二〇年は遅れていると思われる。人生をより豊かに楽しく、大らかに過している様子に日本人の生活意識からしてかなりかけ離れている。その後の私の生き方に大いに影響を受けた。

シャモニーをめざして

（主としてヒッチハイク）

五月十四日　晴　ストックホルム＝ナンタリ

午前中グニラとデート。午後、彼女に見送られてストックホルムを後にする。

五月十五日　晴　ナンタリ＝船でツルク＝ヘルシンキ

初めてヒッチハイクをする。

五月十六日　曇　ヘルシンキにて市内観光。

五月十七日　晴　ヘルシンキ＝ヤハテイ＝ヤバスクラ

五月十八日　曇　ヤバスクラ＝クオピオ

初めて女性ドライバーの車に乗せてもらう。

五月十九日　晴　クオピオ＝ケステラ

男女中学生（十四才）の遠足のバスに便乗、一日中彼等と行動をともにする。夕方中学校に戻り、学校内を案内され、その夜は先生の家に泊めてもらう。

五月二〇日　晴　ケステラ＝オウル＝ケミ＝ロドニエミ

先生の自宅で午後三時頃までくつろぎ、オウルまで送ってもらう。ケミからロバニエミまで警察官の車に便乗。二二時三〇分着、空は夕方のような明るさ。北回帰線上の町。

五月二一日　晴　ロバニエミ

休養日。老若男女のつどうフォークダンスにさそわれて午前一時頃まで踊る。

五月二二日　曇　ロバニエミ＝イナリ

車の通行が極端に減少、二時間歩いてやっと便乗、イナリ着、二〇時。

五月二三日　曇　イナリ＝ノールウエイ国境＝ハンメルフェスト

目的地と反対の方向に行き四時間ロスをする。昼食を民家で御馳走になる。

五月二四日　曇　ハンメルフェスト

北部ノールウェイで比較的大きな町、夜中といえども外で十分新聞が読める。

五月二五日　晴　ハンメルフェスト＝船でノードカップ＝ケ

ストランド

ヨーロッパ最北端ノードカップへ、北海の風は冷たいが、陽は暖かく春を感じる。

五月二六日　晴　ケストランド＝アルタ＝ノルディルサ

北部は車が少なくヒッチハイクは難しい。

五月二七日　晴　ノルディル＝ナルビック

トラックや軍隊の車に便乗。天気にも恵まれて最高、ユースホステルで久しぶりのシャワーを浴びる。

五月二八日　曇　ナルビック＝フオスケ

北部最大の都市、車も多い。しかし乗せてもらえず歩く距離多し。午後二時、やっと便乗。その車がなんと約二百キロ走ってくれた。

五月二九日　晴　フオスケ＝モイラナ

家族づれの車に六回乗った。そのために昼食と夕食を各々御馳走してもらう。

五月三〇日　雨　モイラナ＝レバンゲリ

今日も昼食と夕食をよばれる。車を待つこと三時間、歩くこと二時間、それでも二台の車で三百キロ走ってくれた。

五月三一日　晴　レバンゲリ＝オスロ

昨夜のYHの泊りは私一人、室は暖かく清潔で最高。車を待つこと三時間、やっとオスロに着く。

六月一日　晴　オスロ　市内見学

午後は公園の芝生で休養。女性の水着姿がまぶしい限り。

六月二日　晴　オスロ＝グレベスタッド

国境の橋を歩いて渡りスエーデンへ。グレベスタッドのはずれにて初めて野宿。

六月三日　晴　グレベスタッド＝マルメ＝コペンハーゲン

寒さで目がさめる。手持のパン、ミルク、チーズで朝食。気持の良い朝だ。マルメよりフェリーボートでデンマークに入る。

六月四日　晴　コペンハーゲン　市内見学

YHに日本人約十名同宿。久しぶりに日本語で会話が出来た。

六月五日　曇　コペンハーゲン＝ハンブルグ

二七回目の誕生日、我一人祝う。アムステルダムに行く車に便乗。ドイツのハンブルグで降してもらう。夜、飾り窓に出かける。

六月六日　曇　ハンブルグ＝ハノーバー＝西ベルリン

午前中市内見学。アウトバーン（高速道路）で東ドイツを横切って西ベルリンに入る。東ドイツの国境で一時間半も検閲で待たされる。

六月七日　晴　西ベルリン　市内見学

両ベルリンの境界にあるブランデンブルグの門に佇む。今も米英仏の軍隊が監視している。

六月八日　晴　東ベルリン　市内見学　（数時間）

チャリーチェックポイントより東ベルリンに入る。両ベルリンのあまりの相違を目の当りにする。東ベルリンからの持出し一切禁止。

六月九日　曇　西ベルリン＝ハノーバー＝ケルン

西ベルリンより一気にハノーバーへ。そしてケルンに行く途中、アウトバーンで車が故障。

六月十日　晴　ケルン　市内見学

素晴しいゴシック建築のドームに圧倒された。

六月十一日　曇　ケルン＝ボン＝ライン川＝モーゼル川＝バ

ーンカステル

ライン川の支流モーゼル川はドイツワインのメッカ、山合いの静かな流れ、古い町並にドイツの中世を感じる。ＹＨは小高い丘の上の城跡にあった。

六月十二日　雨／晴　バーンカステル＝トリア＝フランクフルト

トリアに残る中世の遺跡は一見の価値あり。

六月十三日　晴　フランクフルト

昨夜便乗したドライバーの家に泊めてもらう。フランクフルトは見学する所が少ない。

六月十四日　晴／雨　フランクフルト＝ハイデルベルグ

ネッカー川のほとり大学の町らしいたたずまいハイデルベルグの城へ散歩に出る。道路工事の人々が昼休みゆかいに道端でビールを飲んでいる。私にも一本さし出される。さすがドイツだネ。

六月十五日　曇　ハイデルベルグ＝ミュンヘン

夜ホーフブラハウスでビールでカンパイ。

六月十六日　曇　ミュンヘン　市内見学

風邪をひいたらしく体調が良くないので午後ＹＨに戻って寝る。

六月十七日　曇　ミュヘン＝ワルゼンハウセン

体調があまり良くないが出発する。ドイツ国境をオーストリアへ十六時に歩いて入国そのまま歩き続けてスイス国境を越えてスイスの片田舎のＹＨで泊る。十八時着この辺り三国の国境が近い。

六月十八日　曇／雨　ワルゼンハウセン＝チューリッヒ

風邪なおらず十一時過ぎ、ＹＨの家族に送られる。

六月十九日　雨　チューリッヒ＝ベルン

チューリッヒは商工業の盛んな町で騒がしい。首都ボンは静かな古い町並がいたるところに残っている。

六月二〇日　晴　ベルン＝ジュネーブ

レマン湖の辺りを散策、気持の良い朝だ。はるか遠く銀色に光るモンブランをレマン湖の彼方に望む。午後スイス人の友人宅でパーティに招待されそこで泊まる。彼の恋人の水着姿がまぶしかった。

明日はいよいよ数野氏と再会するシャモニーだ。

シャモニーの休日

六月二一日、ヨーロッパの夏はさすがに清々しく雲一つなく晴わたっていた。シャモニーまでジュネーブより八〇キロ、四台の車を乗継いでやっとアルプスに着きました。

数野氏が待っているだろうシャモニーの中心地に建つ像『パロマとソシュール』へ走っていった。彼は像の下のベンチでタバコをすい、輝くモンブランの頂きを眺めていた。一年ぶりの再会である。

シャモニーの我住居となるテント場へ行く。そこはシャモニーより歩いて約四〇分の「プラン・デ・シャモニー」の中にあって比較的静かなテント場。彼がそこを選んだ理由の一つがそのテント場に日本人が他に居ないこと、シャモニーの中心より離れているため静かなこと。シャモニーには三〜四ケ所、非常に設備の良いキャンプ場があり、各地よりキャンピングカーが集まってきます。

キャンプ場からは近くにドリューが、モンブラン、エギユード・ミディが眺められて申し分ない。

六月二二日　晴

久しぶりに昨夜は良く寝れた。午前中キャンプ場の周辺を散策、午後、登山用具と食料品の買出しにシャモニーの中心へ行く。

六月二三日　晴

午前中登はん用具、ザイル、カラビナ、安全ベルト、ヘルメット、ピッケル、アイゼン等を購入。約七百フラン（約四万円）を支払う。午後、さっそく二人で近くのゲレンデ、「ガイヤン」の岩場でトレーニングを開始する。三ルートを登る。非常に暑い一日でした。

六月二四日　雨

シャモニーに来て初めての雨、少し肌寒い。

六月二五日　晴

グランドジョラスを見に行くため、モンタンベールまで歩いて登り、その先は氷河「メールドグラス」が無気味に「ジョラス」まで続いている。エギユー・デ・ドリユーの垂直な壁を間近かに見てすごすごと引き返す。

六月二六日　晴時々曇

ガイヤンの岩場へトレーニングに出かける。四本登って今日の日課を終え、いつも行くスーパーで食事のネタを求め、四〇分歩いてキャンプ場に戻る。

六月二七日　晴

キャンプ場の裏手よりロープウェイが標高約二千米のラ・フレゲルまで運んでくれる。しかし我々はトレーニングと思い歩いた。正面にはモンブランが堂々と白銀に輝き、素晴しい眺めである。シャモニーの町並を左下に見ながらラ・ブレバンへの縦走をしてシャモニーの町へ下った。約十二時間の行動は良いトレーニングになった。

六月二八日　雨

一日中テントの中で過す。男二人にとって苦痛のなにものでもない。

六月二九日　晴

ガイヤンの岩場へトレーニングに出かける。隣のテントで一人暮しをしているアメリカ人、チャリーを夕食に招待する。

六月三〇日　雨

朝から雨、午前中読書、昼食の後昼寝する。わびしい一日だった。

七月一日　晴

朝から洗たくと一週間ぶりのシャワーを浴びる。午後シャモニーのスポーツ店にてアイスバイルと小物を買う。

七月二日　晴

どうやら晴天が続きそうだ。さっそく登山用具をザックに詰めて、テントをとび出す。シャモニーのスーパーで食料を購入。午後シャモニーのはずれ、エゼルトにあるロープウェイの駅までヒッチハイクする。海抜一四七九米のシャルテに一気に登り、次いで登山電車に乗換えて海抜二三八六米までくるともう午後の四時。そして海抜三一六七米のテートの小屋まで登る。テートの小屋直下の急峻な雪渓で陽が沈む。急に肌寒く、頭痛がしてきた。あえぐようにして小屋に入ると登山客は全てシュラフの中で心地よさそうに寝ていた。時計を見ると午後十時半だった。

七月三日　晴

小屋の登山者がほとんど出発してしまった頃、我々はシュラフから

ぬけ出た。頭痛のため食欲もおこらずモンブラン山頂をめざす。グーテ小屋海抜三八六三米、バロの小屋四三六二米までは稜線を歩く。ガスがかかると、方向が見誤り易いところ。ヨーロッパの最高峰四六七七米の白い山に午後一時に立った。快晴、三六〇度展望がまた格別。マッターホルン、モンテローザの山々が見える。頂上は我々二人だけ。決して本日の初登はんではなかったが……よくもここまでこられたものだと喜びをかみしめる。復路頭痛が激しく、テート小屋に戻ってくる頃には足元がおぼつかない。とてもテート小屋直下の急峻な雪渓を下る自信がなくテート宿泊でもう一泊する。宿泊代一日一六フラン、もちろん素泊り。

七月四日　晴

本格的な夏の到来か毎日が素晴しい晴天である。昨夜はぐっすり寝れたので頭痛もなく六時に起床。下山中にあの急峻な雪渓で先行パーティの一人がスリップしてヘリコプターで救出されたらしい。しかしその遭難者は死んだのだと後で聞いた。

お花畑の辺りに下ってくるとさすが緊張感がほぐれたのか体中が熱く、頭がぼんやりとして夢心地になる。

七月五日～七月九日　ずーと晴天続き

モンブランに登った満足感のためか、シャモニーでのテント生活にゆとりを感じる。夏の日ざしの中で散策したり、木陰で読書したり、夜はビールとワインで楽しい夕食が出来た。一つの目的が達せられると気分が一新し、もやもやから解放された。

七月十日　晴

一週間ぶりに明日、エギユード・ミディの南壁を登はんするので、午前中食料や小物の買物をし、昼食はビールとサンドウィチのとりあわせ。

七月十一日　晴

四時起床。シャモニーに戻ってロープウェイで一気に標高三八四二米の山頂へ着く。さすが観光客が多かった。大半の観光客はさらに夏スキーでもするのか、ゴンドラに乗換えてイタリア国境へと大氷河の上を雄々と渡る。我々は彼等とは反対の方向に雪壁を下ってミディの南壁に取付く、午前九時。すでに先行パーティが三～四パーティいた。日本の岩場の様子と違ってホールドやスタンスの位置の間隔が大きいため苦労した。岩肌が粗く、かよわい私の手は登るに従って指先がすりむけてくる。既存のハーケンの間隔もまた大きいので、ザイルを引っぱり上げるのに苦労した。何かとにヨーロッパの岩場は日本のそれと比べてかなり開きがある。

取付きの時、よく晴れていたのに途中で雨が降りだしたり雪が降り出したかと思うと晴れたりして非常に天候がめまぐるしく変化する。頭上にはゴンドラが風をきりながらスイスイと行きかう様はまさしくヨーロッパアルプスである。

登はん完了午後八時半、岩場には我々だけが取残された感じ。ここからロープウェイの駅に戻るのに一苦労して、やっとの事午後十時半に駅舎に戻る。しかしすでにシャモニーに降りるロープウェイは無く、簡易小屋に入って寝る。シュラフは無いが暖房用スチームがあるので寒くはない。ヨーロッパの岩登りはいかにスピードアップが大切かを身に浸みて体験した次第です。

七月十二日　晴のちあられ

エギュード・プランまで縦走しようと思い試行したが、思いのほか時間がかかりそうで途中で引返し、エギュード・ミディに戻って、ロープウェイでシャモニーに降る。

七月十三日　晴

休養日、シャモニーで食料品の買出し。

七月十四日　晴

ガイヤンの岩場で、デモンストレーションが山岳警備隊によって行われるとのこと。見学に行く。そこでアンナプルナ初登頂のフランス隊の隊長モーリス・エルゾークに会って握手する。彼の手はその時の遠征で何本かの指をなくし痛々しく思ったが手の温かなぬくもりが印象的であった。

七月十五日　晴

シャモニーの町中を散策していると、一九八八年にガンで死んだガストン・レビュファーと出合った。

マッターホルンめざして

七月十六日　晴

シャモニーで友達になったアメリカ人のチャリーに送られてシャモニーを出発。二人で大きなザックを担いでのヒッチハイクにはなかなか乗せてくれる車も少ない。別々にヒッチハイクをして、ツェルマントで再会することにした。昼頃乗せてもらった車は十六才ぐらいの素適な娘さんと両親がいて話し（?）がはずみ、彼等の家で食事を御馳走になる。三台目の車でツェルマットの手前までくる。ツェルマットには一般の自動車は入れないので電車に乗換えて午後四時頃に着く。

七月十七日　曇

ツェルマットのキャンプ場は駅の北十五分ぐらい歩いた線路の近くにあり、マッターホルンの頂きが眺められる所にある。

食料の買出しを兼ねて町を散策する。

七月十八日　雨　　停滞

食べて寝て散歩に出かける。幸福な一日でした。

七月十九日　晴

数野氏はキャンプ場に残るということなので、阿部君という学生と二人で、町の東標高二六一六米のフルハルプまでのハイキングに出かける。ツェルマットの標高が一六〇五米なので約千米の登りである。

ハイク中どこの場所からもマッターホルンの雄姿が眺められ飽きることがない。

スイスはさすがに観光立国だけあってハイクの道は巾広く整備され、所々にカフェテリアが草原の道端に建っている。そこにはかならずと言っていい程スイスの国旗が風にたなびいていた。

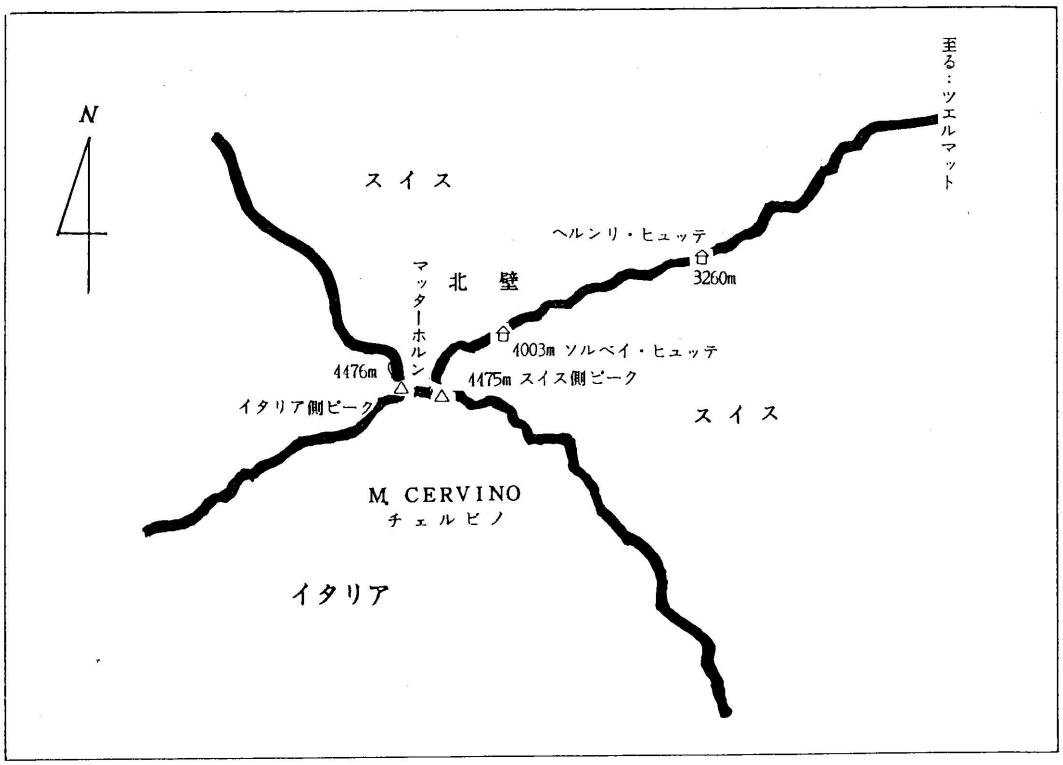
モンテローザを発する氷河の末端から見上げるモンテローザは、マッターホルンに比べて女性的でボリュームのある山塊である。

七月二〇日　晴時々小雨

マッターホルンへ登るタイミングがなかなかつかめない。町の中を散策する。

七月二一日　晴

五時起床、人々が活動する前の静かなキャンプ場を後にツェルマットの町を通り、ZUM　SEEよりシュワルツの池まで歩いて登る。途中我々を見ていた農夫が「マッターホルンの北壁を登るのか」と聞



いてきた。「ノーマル・ルートです」と笑声で答えた。昼過ぎに標高三二六〇米にある「ヘルンリ・ヒュッテ」に着く。

ヒュッテには明日山頂をめざす登山者がすでに数人いた。

七月二二日　晴時々曇

四時起床、新雪が五センチ積っていた。マッターホルンの山頂が真紅に染まる。今日は十パーティ程が頂上をめざす。モンテローザの山々を背後に数野氏とザイルを組んで登り始める。ほとんどコンテニュアスで登れる程のグレード。途中で二～三人の日本人が下ってきた。聞くと昨日登頂し、下山中、ルートを見失い、昨夜はビバーグをしたらしい。ソルベイヒュッテは四〇〇三米のところに、頑丈な小屋が岩にしがみつくような位置に建っている。山頂付近は雪が残っており、鎖が二～三ケ所設置されて登り易い。山頂はスイス側とイタリア側の両方にあり、イタリア側には大きな鉄製の十字架が建っていた。

山頂からの展望は雲がたちこめ視界は良くなかった。

下山は忠実に登路を引返す。東面へと下り易いルートに入り途中で北寄りのルートに修正。ヘルンリヒュッテまで緊張の連続である。日がとっぷり暮れた午後九時頃にツェルマットのキャンプ場に戻った。

七月二三日　晴　休養日

七月二四日　晴後曇

シャモニーで友人になったアメリカ人のチャーリーと学生の阿部君がツェルマットを去って新たな旅へ。別れは寂しいものである。

アイガーめざして

七月二五日　晴

八日間過したツェルマットを離れて次に向うグリンデルワルトまで列車を乗継いで行くことにした。ヨーロッパは目下バカンスの真最中、どこも人が多い。日本人もまた多い。インタラーケン東駅でグリンデルワルト行きに乗換え海抜一〇三四米まで上る。

七月二六日　晴

グリンデルワルトで散策と食料の買出し。

七月二七日　晴

メンヒ（四〇九九米）に登るため、登山電車で海抜二〇六一米のクライネシャイデックに行き、七時発の始発電車で標高三四五四米のユングフラウヨッホに八時四五分着。アイガーの中をトンネルで抜けてユングフラウヨッホのトンネル駅から外に出るとそこにはヨーロッパ最大の氷河アレッチ氷河が広がる氷の世界。スキーヤーで賑っていた。彼等を横目にしながらメンヒに登る。標高差にして六百米、ルートも難しくなく一般ルートを約二時間で山頂に立つ。下りは別のルートで綾線に沿ってユングフラウヨッホに約一時間で戻ってきた。

ユングフラウヨッホにはホテルが三カ所あり我々はツーリスホテルの安い方に泊った。ベッドは山小屋にあるような二段ベッドであるが、十分なゆとりと広さがあって快適である。ホテルからの眺めもまた抜群である。

七月二八日　晴後小雨

午前三時半起床。宿泊費は朝食付の一〇スイスフラン（約九百円）はとても安い。標高四一五八米のユングフラウに向う。所々クレパスがあったりして無気味、アンザイレンをして登る。すでに先行パーティがおりそのトレースを追って午前九時に山頂。ユングフラウヨッホには十時半頃戻る。ホテルの陽当りのテラスでコーヒーを飲みながらゆっくり過す。昼になって雨が降り出したので再び登山電車で下山、クライネシャイデックにくると晴天だったので、グリンデルワルトのキャンプ場まで、アイガーの北壁を右上に見ながら歩くことにした。

七月二九日　晴

グリンデルワルトの周辺をハイキング。まさに映画「サウンド・オブ・ミュージック」の場面にでてくる緑深い草原そのものである。周囲には雪と氷の山々の頂きが輝いている。四時頃キャンプに戻る。

七月三〇日　晴

テントをグリンデルワルトからインタラーケンの湖畔にうつしてキャンプする。キャンプ場は家族づれで賑かである。

七月三一日　晴

午前中湖畔を散策、午後、湖で水遊び。

岩の山ドロミテアルプスを目ざして

八月一日　晴

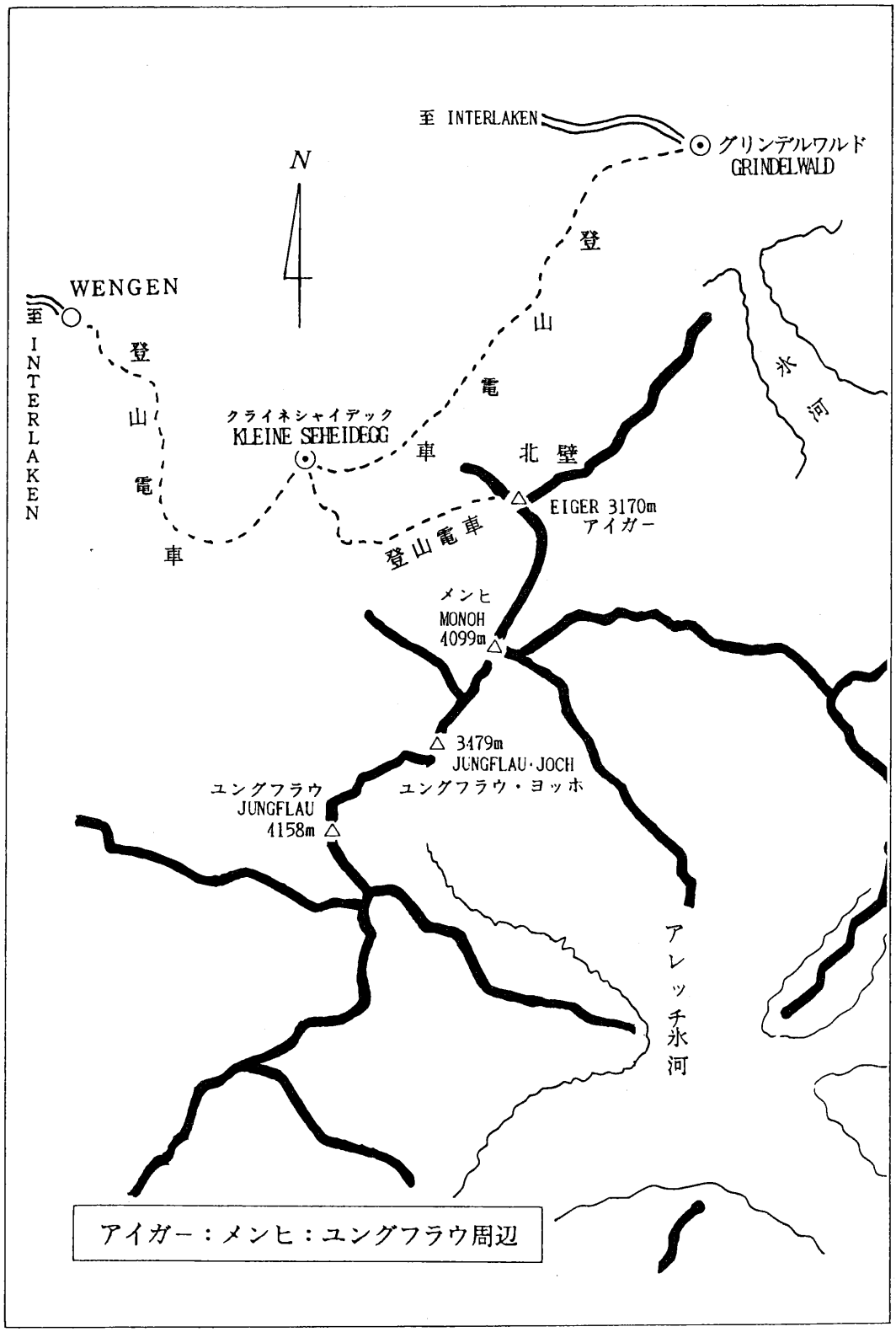
シャモニーに戻ってくる。二週間前と比べると周囲の山々の雪が大分減ったような感じ。しかし観光客が非常に増えていた。

八月二日　晴

六月下旬初めてモンブランとその下部に続くボンソン氷河を見た時、我々の頭上から被ぶさるようなほどの迫力があったのに、今は小さくなったような感じがした。

八月三日　晴後雨

先にシルクロードを経てカトマンズに旅する数野氏と別れて、イタ



アイガー：メンヒ：ユングフラウ周辺

リアへの一人旅に出発。シャモニーの南のはずれでヒッチハイク。モンブラントンネルをぬけるとそこはイタリアである。運良くその車は一気にミラノまで走った。

八月四日　晴　ミラノ＝ジェノバ

午前中、ミラノ市内見学。ゴチック建築のドームがドイツのケルンにあるドームと似ており、教科書でしか見たことがない絵画「最後の晩さん」を目前にしたのは印象的だった。四時頃ジェノバに入る。早速地中海で初泳ぎをする。海水は温く心地良い限り。

八月五日　晴　ジェノバ＝ピサ

イタリアでのヒッチハイクが難しく、なかなか乗せてもらえない。そもそもイタリア人は大家族のため、ほとんどの車が定員でいっぱい。イタリア人以外の人に乗せてもらう機会の方が多い。午後八時頃有名なピサの斜塔に上ってバンザイし下の芝草で疲れをいやす。

八月六日　晴　ピサ＝フィレンツェ

一台も停ってくれないためあきらめて列車でフィレンツェへ行こうとした時、運良くアメリカ人の旅行者に便乗、一気にフィレンツェへ。

八月七日　晴　フィレンツェ　市内見学

八月八日　晴　フィレンツェ

歴史の町は美術館が多い。観光客も多いしそれに暑い。ジェノバで知り会ったアメリカ人のフィリップと、博物館の野外公園で二日間野宿する。午前一時管理人に起され、五〇〇リラ払わせられた。

八月九日　晴　フィレンツェ＝ローマ

今日もイタリア人には乗せてもらえず、ポルトガルとフランス人の若者のおんぼろ車に乗って、あこがれの古代都市ローマに入る。

八月十～十一日　晴　ローマ

市内見学、暑さで参るがむち打って遺跡めぐりをする。

八月十二日　晴　ローマ

ナポリへのヒッチハイクが午前中かかっても成功せず、側でスイカを売っている少年がみかねてスイカをめぐんでくれる。暑さと疲れた体にスイカは最高に美味しい。お返しにスイカ売りを手伝うことにした。ナポリ行きをあきらめ午後十時十五分発の夜行でベニスへ行く。

八月十三日　晴　ベニス

旅の疲れからか、ベニスへの乗継ぎの駅は眠っている間に過ぎてトリエステに向って走っていた。終着駅水の都ベニスの駅前はタクシーといっても車ではなく水上タクシー・水上バスの桟橋になっているのに驚いた。YHにザックを預けさっそく市内見学。交通機関は全て水上バス。市内にはガラス細工の家内工場が多数あり、各々特色のある細工をしていて面白い。

八月十四日　晴　ベニス＝コルティナダンペッオ

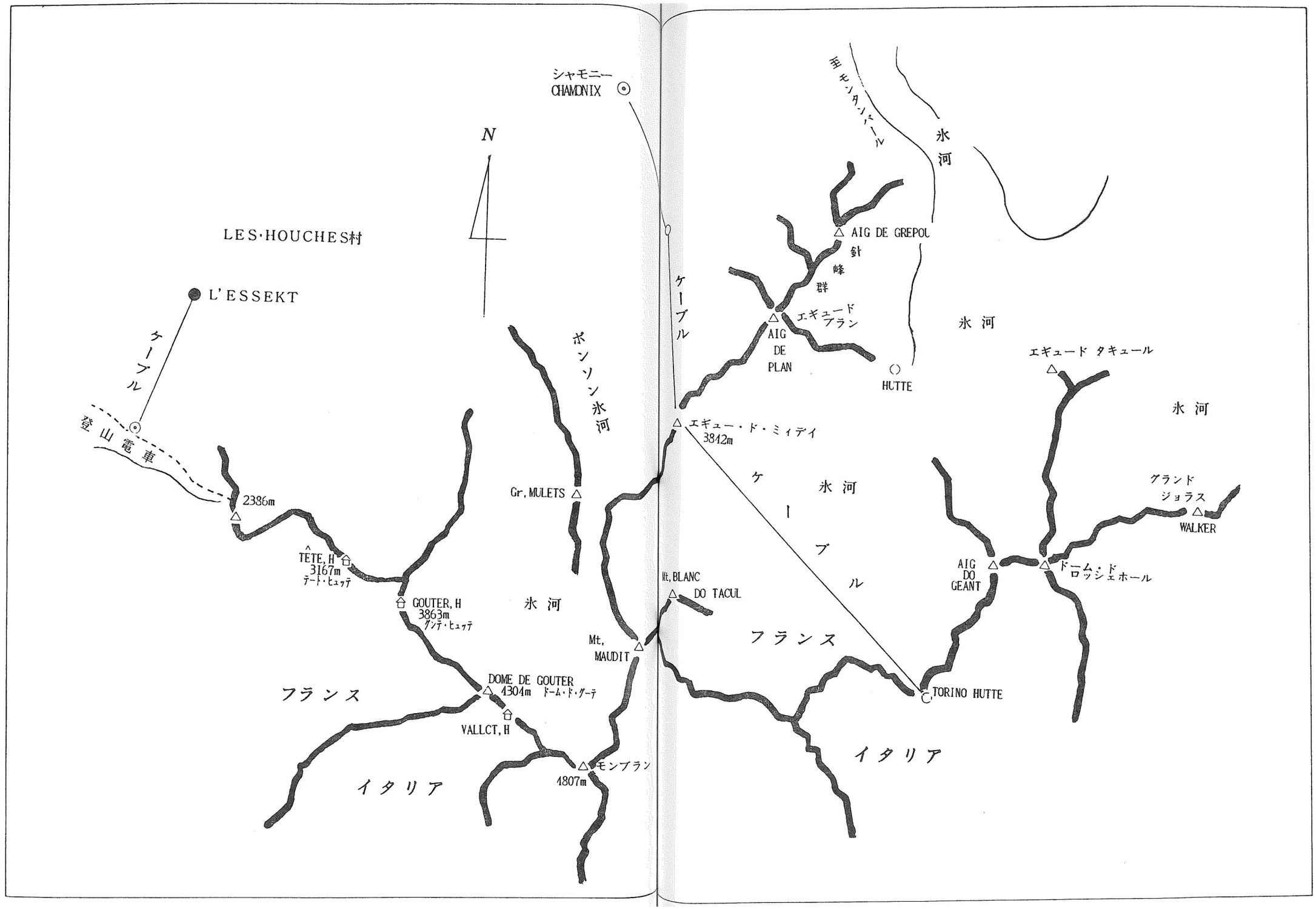
午前中ベニスの町中を散策。午後北イタリアのコルチナまでヒッチハイクをして夕方そこのキャンプ場に着く。

八月十五日　晴　コルチナ

キャンプ場は満員だったがルイジ氏の好意で彼のテント場の側に、ツェルトを張っての生活が始まる。彼はもちろん家族のだれもが英語を話すことが出来なかったがそれでも楽しい休日となる。

八月十六日　晴時々小雨

コルテナの西に聳えるトファナの山へハイキング。第一次世界大戦


シャモニー
CHAMONIX
N
LES·HOUCHES村
L'ESSEKT
ケーブル
登山電車
2386m
TETE, H
3167m
テート・ヒュッテ
GOUTER, H
3863m
グンテ・ヒュッテ
ポンソン氷河
氷河
Gr, MULETS
Mt,
MAUDIT
DOME DE GOUTER
4304m ドーム・ド・グーテ
VALLCT, H
モンブラン
4807m
フランス
イタリア
至モンタンバール
AIG DE GREPOL
針峰群
エギュード
ブラン
AIG
DE
PLAN
HUTTE
エギュード タキュール
エギュー・ド・ミィディ
3842m
ケーブル
Mt, BLANC
DO TACUL
AIG
DO
GEANT
ドーム・ド
ロッシェホール
グランド
ジョラス
WALKER
TORINO HUTTE

の激戦の跡が所々残っていた。そんな中でエーデルワイスの群生に出合い楽しい一日であった。

八月十七日　晴

ルイジ氏の家族とラゴ湖二〇六〇米へハイキング。そこからドライチーメの三山が遠望出来た。昼食はボリュームのあるイタリアン・フードを御馳走になる。

八月十八日　晴

山の朝はいつも気持がいい、ヒッチハイクで「ドライチーメ」の山域へ行くことにする。有名なミズリナ湖を過ぎて、ドロミテ特有の岩の山々が、まるで大自然の芸術品を生み出したような感じを受けた。標高三〇〇〇米前後の岩の山が突然平野からもり上ったようで、草木が一本も生えていない。約四時間のハイキングは全くもって満足するものだった。

八月十九日　晴　休養日

午前中洗たく、午後彼等とショッピング。キャンプに戻ってサッカーの紅白戦に出場。とんだ休養日でした。

再びシャモニーへ

八月二〇日　晴後曇

コルチナでの六日間もまた私には忘れえぬ思い出となった。ルイジ氏の家族、そしてキャンピングの人々の暖かな心こもるもてなしに別れをつげる。この素晴しいコルチナの自然の中をしばらく歩くことにする。歩き疲れた頃、スイス人夫妻の車に便乗、話しがはずみ三人でイタリアの片田舎ペッゾーの村に入る。

八月二一日　曇

午前中夫妻と村を散策、午後再会を約して彼等は旅出つ。私はここで知合ったマリア・テレーサと別れがたく、もう一泊することにした。

八月二二日　曇後雨

離れがたいペッゾーの村を後に一人峠への道を歩く。ガビア峠標高二六二一米は雲のため視界はなく、スイスへの国境へとヒッチハイクする。

八月二三日　曇　サンモリッツ

ヒッチハイクで便乗したスイス人夫妻が、運良くサンモリッツへ行くというのでその日はずーっと彼等と行動を共にした。

八月二四日　晴時々曇　サンモリッツ

サンモリッツを散策しているとスイス人の登山者に誘われて、標高三九〇五米のピッツ・パルウに登ることにする。シャモニーに置いてきたのでアイゼンとピッケルを運動具店で借りる。昼過ぎロープウエイで標高二九七三米の小屋まで上る。眼前のベルニナ山塊の山々に圧倒される。

八月二五日　曇後雪

午前三時起床。星空の美しい夜明け前、すでに七～八パーティがヘッドランプを照して先行していた。頂上近くになって風雪となる。まるで日本の冬山にいるようだ。視界は全くきかず早々に下山。

八月二六日　曇後雨　サンモリッツ‖コモ

便乗した車で再びイタリアへと再入国。レノという町の理容店前で車を待っていると、そこの主人が私の頭をみかねて散髪をしてくれた。代金は、日本に帰国したら二人で写した写真を送ってくれればよ

いということだった。

八月二七日　晴　コモ＝ルガノ

湖畔を散策してルガノに入る。ＹＨが満員のためルガノの湖畔で野宿。夜中に不審人物と思われてポリスに起された。

八月二八日　晴　ルガノ＝シオン

コルチナでのキャンプ生活と再三の野宿に、小嶋先輩に送ってもらったツェルトが大いに役立ち感謝の気持がわく。

清々しい朝の空気を胸いっぱいにして歩き始める。スイスとの国境近くになると車が少なく歩くことが多い。シンプロン峠を越えてスイスへ。

八月二九日　晴　シオン＝シャモニー

シオンのＹＨのシャワー室は男女同じ室だったのは驚いた。

シオンにはいたるところに、中世の古城が小高い丘の上に残っていて興味深い。

ピレネーの山をめざして

八月三〇日　晴後雨

一カ月ぶりのシャモニーには秋の訪れを感じた。観光客もめっきり減っていた。テントから雨もりがして一人のわびしさを感じる。

八月三一日　晴後曇

明日シャモニーを再び出発。こんどいつ訪れる機会があることやら。ヨーロッパアルプスでの日々を、今は顔見知りもいなくなったキャンプ場で寝ころび回顧する。

九月一日　晴　シャモニー＝ジュネーブ

今は亡き山岳同志会の小川君とジュネーブで再会。夕食を御馳走になる。シャモニーでの彼のアドヴァイスに我々は大いに勇気づけられた。そして彼のたくましい青春に感動した。彼は一六〇〇スイスフランで中古を買い、シルクロードをカトマンズに向うとの事。

次の年の五月にカトマンズで彼と再会することになろうとは今知るよしもない。その彼が三十才代で一人穂高で死んだ。

九月二日　晴　ジュネーブ＝リヨン＝ニーム

昨日はフランスからスイスへ、今日はスイスから再びフランスへと、まるで国内旅行のような気分で国境を通過する。リヨンは大都市のため興味なく通過、一気に南フランスのニームに。午後九時ＹＨに到着。

九月三日　晴　ニーム

市内見学。ローマ時代の遺跡があり見る価値大いにあり。しかし説明書が全てフランス語。フランス人ってのは今までの外人の中で一番とっつきにくいと思った。

九月四日　晴　ニーム＝カルカソン

マルセイユに近いので立寄ろうと思ったが、車がなかなか止ってくれずあきらめてカルカソンへ行く車に便乗。途中のレストランで昼食。十六フランのフランス料理で大いに栄養をつける。

九月五日　晴　カルカソン＝アンドラ

中世の城が原型に近い形で残っている古い町、午前中城内を散策。二時間程歩いた後、調子よくヒッチハイクでアンドラに入り、キャンプ場にテントを張る。

九月六日　晴　アンドラ

ピレネーの山にこのアンドラが一番近いと思ってやってきたが、大

いにあてがはずれた。アンドラはまさにショッピングの町。ホテルとレストランがひしめいていて私には全くおよびでない町だった。

九月七日　晴　　アンドラ

どこへ行けばピレネーの山に入れるのか人々に尋ねまわる。

午後、疲れたのでキャンプ場で読書とひる寝。

九月八日　晴　アンドラ‖セント・ジロム

ピレネーの最高峰アネトーの登山口がさらに西のルションという町だとわかる。

九月九日　晴後雨　　ジロム‖ルション

フランスはなかなかヒッチハイクが難しい。二日がかりでルションに入る。ホテル「オベルジュ」という安そうな所を選んで泊る。美人の女主人は英語が全く話せない。同宿の学生カンボジア人夫妻が唯一の話し相手である。明日登るアネトー（標高三四〇四米）の情報に乏しく、地図もないまま登れるか少々心配だ。

九月十日　晴後曇

ホテルの美人の主人に余分な荷物を預けて、山に登ることを伝えるが十分な説明が出来なくて、後日大変な騒動が起ころうとはこの時夢にも思わなかった。

今までの国境越と違って、今回は初めて届出なしで山越してスペインとの国境を通過することになった。峠に立って初めて見るピレネーの最高峰アネトーの山頂は万年雪が白く輝いて日本的な山容である。裾野には山羊の群れがのどかに首の鈴を鳴しながら草を食べている。

眼下に見えるスペインの山小屋レンクルザ（二一四一米）に下る。そこで二人の日本人に出合ったのには全く驚いた。彼等の好意でテントに泊めてもらう。

九月十一日　晴

快晴の朝、昨日アネトーに登った彼等とオセトーの谷で再会しようと言って一人アネトーへ出発。九時前雪渓に到着。アイゼンを付けることなく一時間足らずで山頂に。頂上にはカソリックの国らしく二米以上もある大きなサンタ・クロスが建っていた。

下山は上りと反対の南斜面をオセトーの谷に向って下る。今から思うとよくもまあ地図もなくて一人で登山出来たと感心する。

九月十二日　曇

二日前に出会った市川島根大学講師と、永川都立大学講師の三人で、ピレネーの山旅が始まった。スペインの田舎「ベナスケ」に下山して食料品を調達。マトン、ワイン、野菜、チーズ、タマゴ、パン等々、まるで遠征隊のようなぜいたくなメニューである。ベナスケの村から一時間歩いたところのサンタ・マリヤの小屋で一泊する。

九月十三日　曇

小屋を正午頃出発、歩く道すがらキノコを採集、今夜の料理に使用することにする。標高一七三〇米の小屋まで二ピッチで到着、ここをBCとする。

さっそくたき火をしてマトンのバーベキューをする。

九月十四日　曇後雪

ピレネー第二の高峰ボセトー（標高三三七五米）に登る。昨夜はワインを飲み過ぎて起床八時となる。平均的にピレネーの山は、標高二五〇〇米まで夏の間は山羊が上ってくる。それより上になると岩と池が点在して草木がなくなる。相対的に歩き易い山域である。山頂まで

の約二〇〇米は、ちょっとしたフリークライミングが続いて楽しい山登りが出来た。

九月十五日　晴

食料がなくなってきたのでベナスケに戻って買出しをする。昼食はレストランでスペインのフルコース、なんと百ペセタ（約五百円）の安さにびっくりする。

九月十六日　晴

時計を見ると八時。ピレネーでは毎日、かつてない御馳走とワインに栄養が体中に浸みわたるようだ。今日はキャンプを二七三〇米に上げる。

九月十七日　晴

ペルリグエロからモンパへの国境稜線を縦走。昨夜飲んだコニャックのためか二日酔の朝、三二二一米のペルリグエロの山頂から見わたすアネトー、ポセトーの山々を見ていると頭痛もなくなっていた。

九月十八日　晴

日本の新聞に「日本人ピレネーで行方不明」と載った。

縦走中、登山者に『山岳ポリスが行方不明の日本人を捜索している』ことを聞かされてあわてて三人はフランス側へ下山する。下では警察のジープが待ちかまえ、そのままルションの警察署へ直行。

フランス語の話せる市川氏を間に調書をとられたり新聞社に写真をとられたりして大騒動の一日だった。九日間ぶりにホテル・オベルジュルに戻った私を女主人は、その無事を心から祝って食事に招待してくれた。その夜パリの領事館より呼び出しを受けパリに行くはめになる。

九月十九日　雨

スペイン語を話す永川氏と市川氏のおかげで楽しいピレネーの山旅が出来たし、フランスの警察の調書や新聞記者の間に立って通訳してくれた市川氏に心から礼を言って昼食後別れた。彼等と翌年七月に、再び三人でピレネーの山旅が再開されようとはこの時、思いもしなかった。

その後、私はパリの日本領事館に出頭、ピレネーの山中での説明とお詫びを申し上げる。そして十一月一日になって、やっとスペインのセベリアに滞在中の私宛にパリ領事館から請求書が届いた。内容は『ピレネーでの捜索費三四〇フラン』。急いで送金しました。日本を出発して十カ月以上過ぎた。この間、出合った人は日本人を初め色々の国の人々等数えきれません。全てが全ていい人達ばかりです。私の旅がさらに一年以上も続けることが出来たのも、そうした人々の素朴で暖かな心に接したからでした。私の青春の集大成となり、その喜びと感謝の気持はうまく文字にできません。

ピレネー山中にて私の事が新聞に「行方不明」と載ったことで、KACの人々に多大の御迷惑をおかけしたこともお詫びしなければなりません。私はKACに入会したことで、諸先輩をはじめ皆さんのおかげでこうした山旅が出来て「我青春」をさらに豊かなものにすることが出来たのでした。

ケニヤ山とキリマンジャロ山

土居健次

アフリカ大陸には大きな山が三山ある。東アフリカはタンザニアのキリマンジャロ、標高五八九三米。ケニヤのケニヤ山、五二〇〇米。次いでウガンダとザイールの国境に聳えるルウエンゾリ山五一一〇米。赤道付近にありながら三山とも頂上には万年雪が見らられる。当初、私はアフリカの山に登るなど夢にも思わなかったが、ピレネーで会った市川氏よりアフリカ行きの話を聞かされ大いに興味を持った次第で、これら三山に登りたいと思う気持が大きくなり、当時インドを旅行中の私は一九七二年七月一六日ニューデリーよりアムステルダムまで飛んだ。

飛行機の運賃は一八六米ドル。再度ピレネーの山旅を楽しむべくスペインへ南下、彼等と共に一ケ月以上山旅を楽しんだ。ピレネーの山旅の後パリー、ロンドンへと北上し、九月上旬ロンドンより市川氏と二人で、ケニヤの首都ナイロビに飛んだ。初めてのアフリカの地に少々興奮をしていたのを覚えている。

ナイロビは赤道直下の都会で非常に暑い土地を想像していたにもかかわらず、実際には日本の夏とかわらないくらいだが、むしろ空気が乾燥しているので夜はセーターが必要な時もある。ナイロビは標高一六八〇米のサバンナにあり、人口は三五万人以上が住み、中心地は近代的なビルが建っている。アフリカというイメージからは全く想像すら出来ない都会の光景である。町行く人は黒人が主であるが、白人、インド人もかなり住んでいる。イギリスの植民地だった頃、イギリス人がインド、パキスタンから人々をたくさんこの東アフリカの地に連れてきて、彼の指揮のもとにインド人等が植民地支配をしてきた。各国が独立後、白人の大半は自分達の国に帰国したが、大半のインド人達は残り東アフリカの経済界に君臨するようになった。。当時民族主義が叫ばれて、インド人とアフリカ人との間で摩擦が数多くあった。当時ウガンダの大統領アミンは、インド人に対して国外追出しの政策をとっていた。そんな状況の中では、ウガンダよりルウェンゾリ山に登る計画は危険と思い中止した。

先づ我々はケニヤ山に登るためにナイロビでケニヤ山の情報収集と地図を購入。登山ルートには最もポピュラーなコースにする。

九月一四日

登山のための食料買出しと装備の点検をする。

九月一五日

ナイロビを午前九時発のバスで北上する。午後三時ナルモロに着く。バスから降りるとニコニコしながら子供達がたくさん、もの珍しそうにして我々のまわりにやってくる。彼等には我々がケニヤ山に登ることが自然に解るらしく、今夜の宿泊場所を教えてくれる。足りな

い食料品もこの部落で調達可能。肉、ジャガイモ、玉ネギ、玉子、米等を購入。価格はナイロビと大差なし。イギリス人の経営するリバーロッジは宿泊費一人一〇ケニアシリング。ポーター兼案内人を自称する原地人のキクユ族は、しきりに自分達を雇って欲しいと言ってくるが、我々のような気楽な貧乏旅行者には必要ないとことわった。ポーターの料金は一日二〇ケニアシリングで安い。

九月一六日

リバーロッジを九時一五分出発。ジープに便乗、ナショナルパークの入口まで約四〇分、車代三〇シリングを支払う。

ケニヤ山ナショナルパークの入場料金一〇シリング。パーク内でキャンプするのにも、一人一泊につき五シリングが徴収される。

今日登山するのは我々だけである。ジープを降りた我々は一〇時四五分に歩き始める。テレキハット着一五時四五分。途中に岩小屋があり、リバーサイドロッジから歩いたとしたら手頃な泊りの位置である。

九月一七日

テレキハット（八時）―トップハット（一二時二〇分―一四時）―レナナピーク（一五時）―トップハット（一七時）

テレキハットから三〇分歩くとマチンダーズキャンプがあって、色とりどりのテントが一〇張近く設置されている。岩の間から時々、ネズミに似たハイラックが出てきてエサを探しにかけまわっている。

ケニヤ山の主峰バテイアン、その横にネリオンの岩峰が天に向って鋭く突き上げているような風景が、トップハットに登ってくると眼前に大きく広がる。そしてその雄大さに近寄り難ささえ感じる。昼食後偵察を開始する。左手にレビスの万年雪を見ながらレナナピーク（四九〇〇米）に登ってくるが、それから先はガスのため視界が悪く、万年雪を縦断してカミハットに達するコースはクレパスもありそうなので断念した。そしてミンバの峠を経由した方が安全であるという結論になった。

トップハットに戻った私は急に頭痛がして身体に震えがしてきた。丁度四人組のアメリカ人がやってきたので、私の症状を説明して鎮痛剤をわけてもらった。横にいる市川氏は食欲旺盛なのに、こちらは二日間全く食欲がなかった。

九月一八日

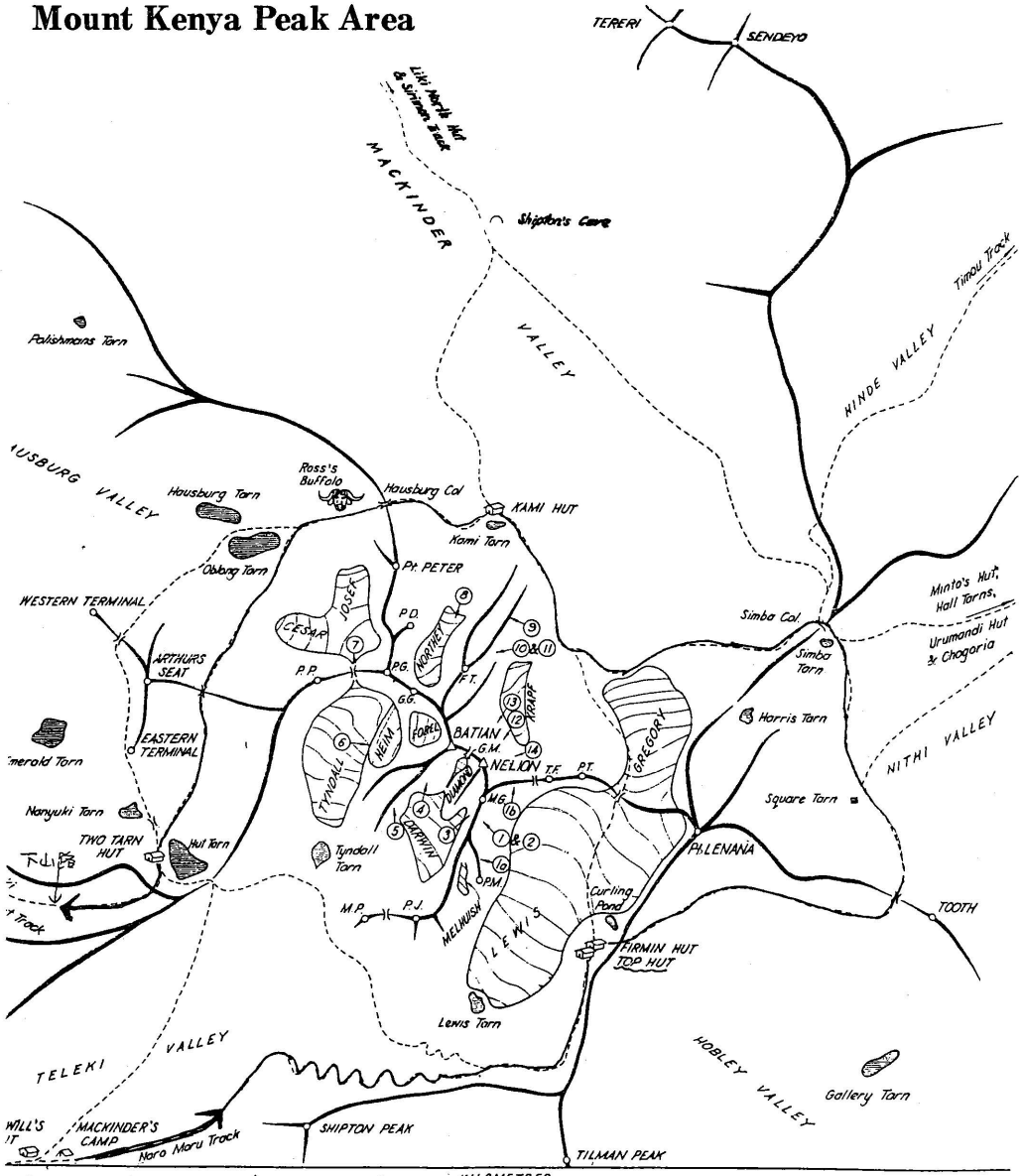
起床九時―出発（十一時一〇分）―シンバ峠（一二時二〇分―五五分）―キミハット（一四時二〇分）

ゆっくりした朝を迎える。雲一つない青い空に、ケニヤ山の岩峰を眺めての温かいコーヒーは私の気分を和らげてくれる。

岩峰群の登はんルートを目で追うが難しそうである。ザイルもない我々にはとても山頂にまでは登れないと思ってしまう。せめてこのバティアン、ネリオンの岩峰をとり囲む一周コースに留めたい。一周コースは登山道も整備され、山小舎やテントが無人であるが要所要所にある。シンバの峠から眼下のカミハットのブリキで作られた小屋が目に入る。小屋までトラバース気味に登り、下りのない水平なコースが続く。

岩峰群の南東側には万年雪が多く見られたのに、北西側には全くない。氷河も同様大きく北西側の方が後退している。取付くには南東側より北西側の岩壁からの方が登りやすいかも知れない。今の私にはそ

Mount Kenya Peak Area



れ以上近くまで偵察する気力がなった。

九月一九日

カミハット（八時）―ハスバーグの峠（八時三〇分）―オブロンの池（九時三〇分）二の池ハット（四四六〇米）一一時二〇分～一三時三〇分―ハイランドキャスル（一六時三〇分）―ビバーグ地（一七時三〇分）

バテイヤンとネリオンの岩峰をほぼ三分の二周した我々は、二つ池の中間に建っている小舎から下山にかかる。今回は満足な地図もなく、ただケニヤ山岳会の発行している英文のガイドブックと簡単な図面を頼りに登った。そのために岩峰の主峰バティアン（標高五一九九米）の山頂には立つことは出来なかった。

ナロモルのすぐ北にあるナンユキという町へ下山するコースをとる。最後の山小舎で昼食した後、順調に草原状のコースをたどっていくが次第にコースが見つけにくくなる。なにせナショナルパークの中にいるのでいたる所に動物の足跡が見られる。時にはサイのようなばかでかい足跡に出合い一瞬緊張し、そんな折に限って近くで草木のゆれる音にその緊張度は極限に達する。いつなん時そうした動物と出合うかも知れない所である。その内に日も暮れかかりビバーグ地を探すことになる。夜中動物におそわれないかと不安がつのりなかなか寝つかれない夜だった。

九月二〇日

待ちどおしい朝を迎えた我々は、ナンユキまでたっぷり一日はかかる草原の中を、恐怖に追いたてられながらどんどん下っていく。振返って眺めるケニヤ山は濃い緑色のじゅうたんを敷き詰めたかのようだった。そしてその上に岩峰群が申し訳け程度に小さく乗っている。

ナンユキには午後五時頃に着き、ここで泊ることにした。

九月二一日

前日の登山の疲れをいやす間もなく、アフリカ大陸最大の湖ビクトリア湖へ向う。途中ナクル湖でナショナルパークにて有名なフラミンゴの大集団を見ることにした。湖面一ぱいがまるでピンク色に染まる光景は正に野鳥の宝庫を感じさせる。

ビクトリア湖は周囲をケニア、ウガンダ、タンザニアの三国にまたがる広大な湖。ケニヤのキスムから各々の都市、ムワンザ、エンテベ、ポートベルへの航路がある。キスムから眺める湖は私には琵琶湖のそれと大差がないように思える。航路を経験すればまた違った印象があったのでしょうが、今回は時間とお金がないので割愛した。

ナイロビに帰えってきた我々は次の山キリマンジャロの準備に入る。とは言っても別に大した準備もしないで休息をとることにする。

キリマンジャロの登山口にあたるタンザニアのモシという町で再会することにして市川氏と別れ、ヒッチハイクでケニヤ第二の都市で港町のモンバサに行くことにした。ケニア人の大半はキクユ族であり、インドやアラブ人に比べると明るく親切である。現場の仕事をしているのはほとんどが黒人である。その上にインド人やアラブ人がいるケースが多く見られる。農村から人々がどんどん都会にやってきて、彼等の下で働くケースが多い。そのために貧しい人が黒人に多く見られる。しかし彼等には全く暗さが見られないのは黒人の先天的なものであろう。モンバサとナイロビ間は日本でいう国道一号線のようなもの

で簡単にヒッチハイクが出来、約三百kmもトラックに便乗した。

モンバサでインド行きの船便を求めて町の中を船の代理店を探し歩く。しかし容易に見つからない。まるで日本の真夏を感じさせる蒸し暑さに閉口した私はあきらめて南下、タンザニアの最初の町タンガに午後八時頃に着いた。さっそく宿探し、適当なところがなく空屋を見つけてそこで一夜を明かす。午前六時横の物音で目がさめると、いつの間か同室にだれか寝ていたらしく身仕度をして出ていった。

翌朝アフリカの喫茶店とでも言ったような店で朝食をして町の中を散策。さすがイスラム教の国らしく黒いベールをした黒人女性を数多く見かけた。

タンガからタンザニアの首都ダル・エス・サラームに入る。ここでもインド行きの安い船便を探し歩いたがうまくいかず、十月一日に市川氏とモシで再会する日が近いのでダル・エス・サラームを出発する。

キリマンジャロ

モシの町に着いて初めて見る伝説の山キリマンジャロは別名『キボ』とも言う。モシから眺める雄大さに先づ心をうたれる。何かの本に書いてあったせりふを思い出す。『赤道直下にそびえる唯一白い頂の山キリマンジャロ』正にその表現どうりだった。

市川氏とはバスターミナルで再会したが、彼は昨日から原因不明の腹痛のため登山どころではなく、しばらく様子をみることにする。

一〇月三日

市川氏の復痛もすっかり良くなったので出発することにして九時三〇分発のバスに乗る。バスターミナルではナイロビのユースホステルで会った早川氏と再会し、いっしょに登ることになった。

バスに乗ること約一時間でキボホテルに着く。ここで小舎使用料一人一泊五シリングで四日分各自支払う。昼前キボホテルを出発。マランゲの村を通過してしばらくの間、一・五米巾の道が続く。まるで富士山の裾野を登るようなゆっくりした勾配である。周囲は身長以上の草木が繁り、きわめて展望が悪く退屈な登りである。前方に今夜泊るマンダラハットが見える頃、草木も低くなり展望がよくなり山らしさを一段と感じる。午後五時に小舎に着き、さっそく夕食の準備にかかる。眼下に広がる雲の間から湖と森が見える素晴しい眺めであった。

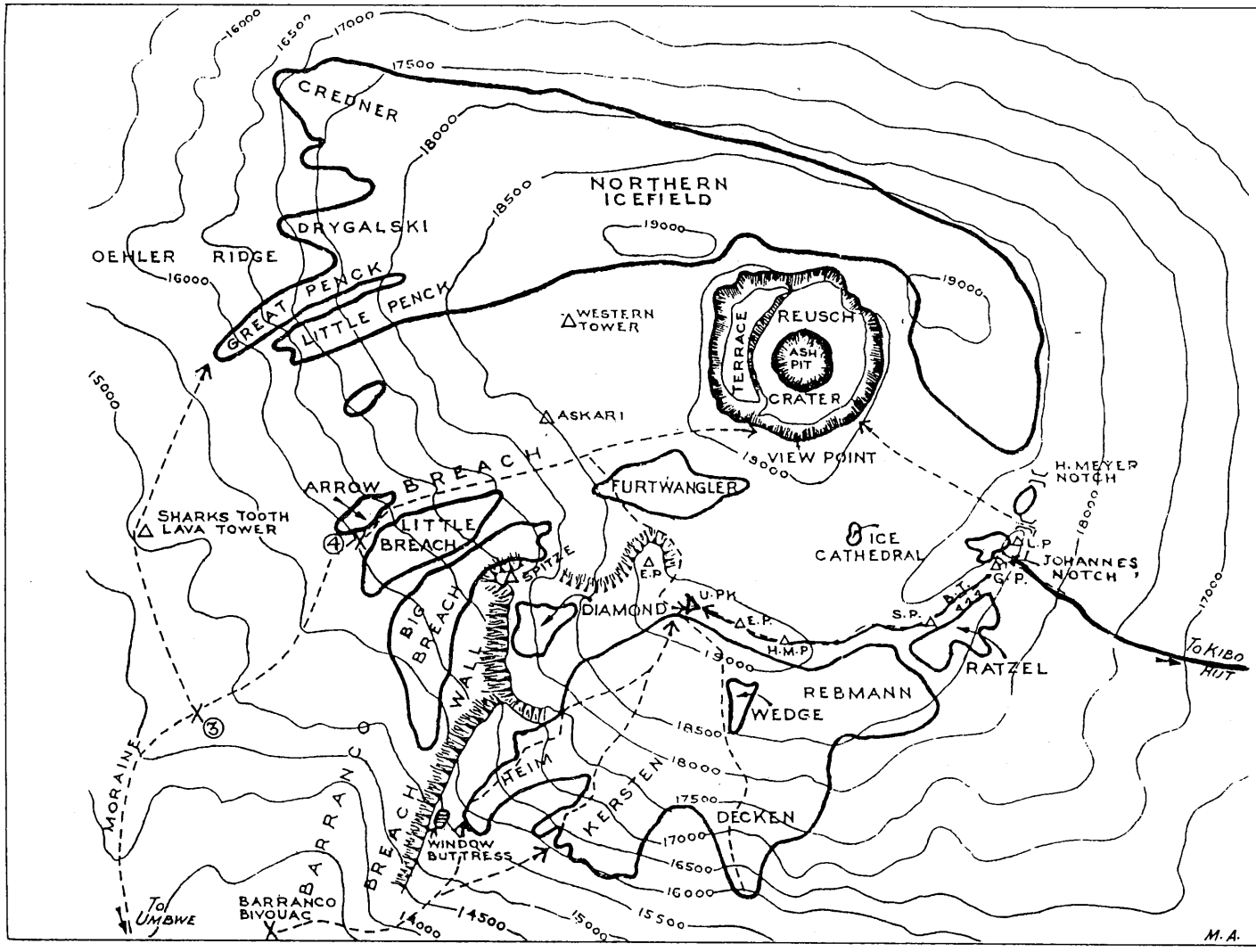
一〇月四日

起床七時―出発八時四〇分―ホロンボハット着　一三時一五分

早朝ガイド二人にポーター五人を連れたアメリカ人三人が出発した。雲の多い空の下、小舎のテーブルを外に出して朝食をとる。

この小舎ぐらいが森林限界になっていて、約二〇分も歩くと眼前が開け高原状になり、コースを明白にたどることが出来る。空は雲でおおわれ雨が降り出す。いくらアフリカでも標高三千米に近くなると太陽が出ないと肌寒く、雨が降り出すとさらに寒くなる。雨具を持参しない我々は濡れるしかなく、せめてピッチを早めてホロンボハット（三七二〇米）にかけ込むことであった。小舎には先程のアメリカ人達とユーゴスラビアの山岳会の人々がいた。さっそく熱いコーヒで昼食をとる。寝るまでたっぷりと時間があるので各自で時間を過す。夕方になって雨が止み、キリマンジャロの山頂付近が見え出すと下界の雲の流れも早くなって回復の兆しを感じる。

キリマンジャロ山頂周辺図



注：G・Pギルマンズポイント
U・pkウールピーク